愛國婦人會機關

愛國婦人

每月五日二十日發行
一部金參錢　一ケ月金六錢　半年分參拾六錢　全國無遞送料
廣告料一行六拾錢
本號全部禁轉載
發行所　東京麹町區(牛ケ淵公園)　愛國婦人發行所
發行兼印刷人　山澤俊夫
編輯人　手島益雄

電話番町五百二十番

愛國婦人會の目的は遺族及癈兵を救護するにあり

◎本號には山梨支部第一回總會紀念寫眞を附錄とす

社說

集會の禮儀

人と毛物との違ひは、色々あらんも、禮儀の有る無しは、慥に其一つ、然も大切なる違ひの一なり、否毛物にても尾を振り、飛び附きなどして、一通りの禮はなすものなり、况んや人に於てをや。

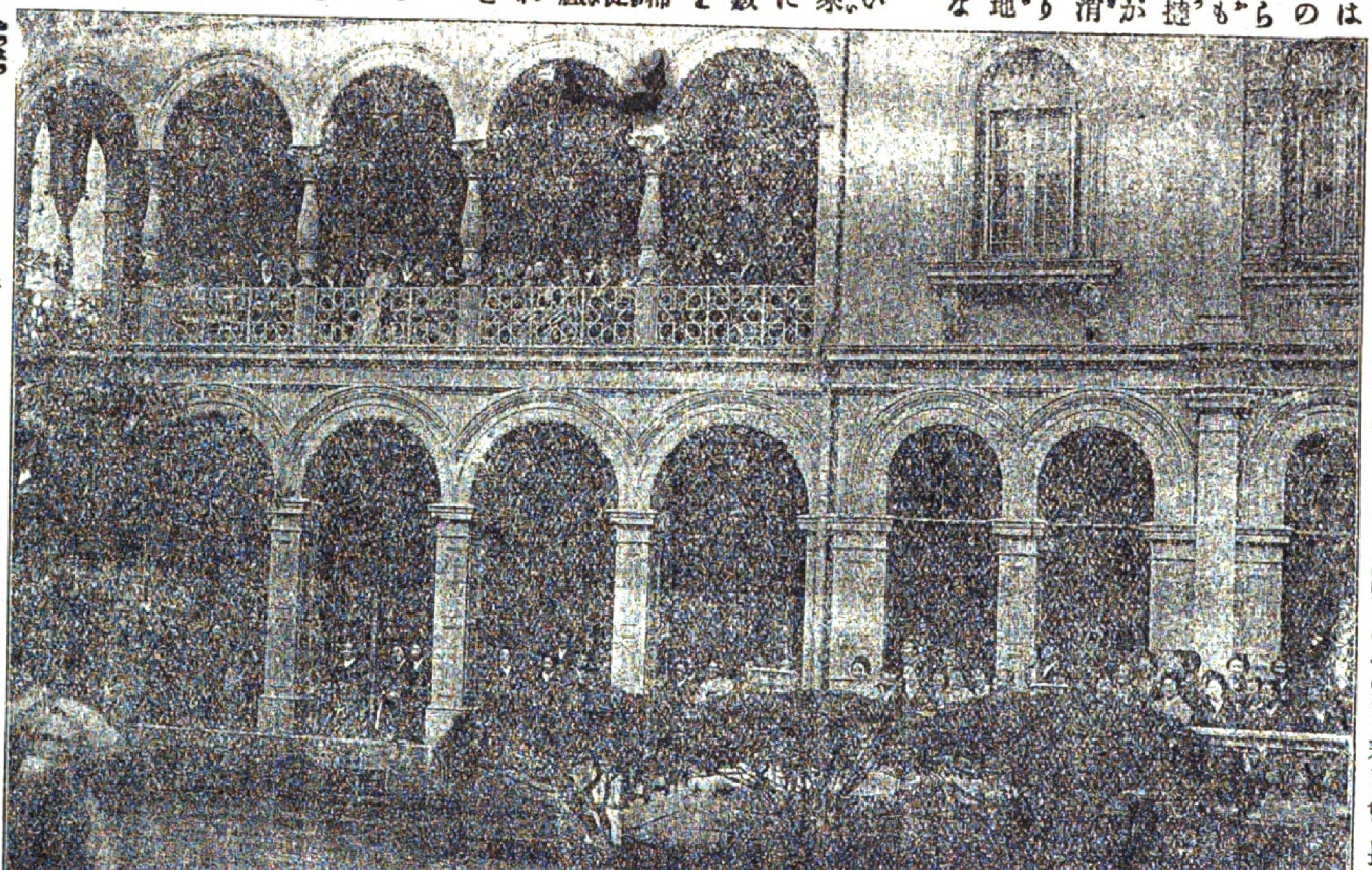
文明とは、唯物質上の進歩を云ふにあらず、一體に人間上品となりて、禮儀の良くなることをも含むものなり、如何に紅粉を施し美服を纏ひても、禮儀之に伴はざれば、猿に着物を着せたると同様、見られたものにあらず、否美裝せるだけ、却て醜くうつるものなり。

日本も戰爭以來世界列强の仲間入りせりとて、甚だ得意を催せるは、尤もの事にて、異議なしと雖も、世界の注目を惹けば、惹くだけ、身を謹みて、無作法の振舞あるべからず、大國の强國のと威張つては居るが、あの作法を見よと、外人に爪彈きさるゝやうの事ありては、これぞ折角の顔に泥をなするものにて、殘念千萬にあらずや。

然らば我が國人の禮儀には缺けたる所ありやといふに、良き所も多けれど、隨分如何しきものなきにあらず、我が國人は、個人間の禮儀は、頗る丁寧なれども、集會に於ける禮儀に至りては、時には如何にも亂暴狼藉、殺風景千萬のことあり、一人の時は如何にも殊勝らしけれど、大勢となると、人間が生れ代りたるが如く、シルクハツトを阿彌陀に被りて、我れ一にと押し合ひ、へし合ひ、拳骨握み合ひを演ずることあり、殊に立食などあるときは、其勢一層凄まじく、餓虎の餌を爭ふが如く、本眞劍となり、血相を變へて爭ふさま、此世ながらの餓鬼道に陷れるが如し、而して其一人一人を吟味すれば家に餘財ある溫厚の紳士にして、慈善の譽れ高き人もあり、あの人がと思はるゝ人ばかりなるに、集會となると、恰も惡魔の魅るが如く、別人となることそ、不思議なれ、畢竟集會に於ては、個人は多數の中に沒して、眼立たず、如何なる事をしても、尤むるものなしと、日頃のたしなみを忘れて、人間先祖の毛物の本性を現はしたるものといふの外なし。

然らば婦人は如何にといふに、男子の極端はなきも往々之に類するものあるこそ遺憾なれ、婦人個人間の禮儀は男子よりも一層丁寧にて、丁寧過ぎるほどにて、樣々の呼吸掛け合ありて、餘所の見る目も肩の凝るほどなれど、扨て集會となると呆れた振舞なきにしもあらず、不相變の押し合ひへし合ひにて次第秩序といふものなく、押しの强きが勝にて、謙遜にして婦人らしき婦人は、何時も後の方に殘され、お馳走も充分食べて、お土產げまで包みかへる人あるに、中には何物をも得ずして、空腹を土產げに歸る者もあり、他の思ひやりなきの致す所にして、男子と同じ原則を行くものといふべく、婦人だけに一層殺風景を増すのみ、衣食足つて禮節を知るといふ其衣服だけは、足り過ぎたる結構千萬なるものを着て出るに、食の一方が足らぬかの如く、禮節の亂るゝは、如何にも苦々しき事にあらずや、これも日本人同志ならば、内輪にて、如何樣にても、我慢出來るも、外人との交際も繁くなりたる今日、斯樣の事ありては世界への耻曝らし、恰も市に鞭撻たるゝが如く、消えも入りたき心地するなり。

これといふも從來我が國には多人數の集會を催すこと稀れに、從つて其禮儀に慣れざることなれば、今までの不體裁は恕するとするも、今後は決して此事あるべからず、唯個人間の禮儀を、集會の時に應用すれば、それで良きことなれば、別段むつかしき事にあらず、男女を問はず、國民の實行すべき所のもの也。



本月十二日本會の催したる華族會館に於ける韓國特使歡迎會の光景、階上向て右より勳章を帶びて立てるが伊藤侯爵夫人次は神鞭議長伊東子爵夫人次は理事毛利公爵母堂韓國委員部長鍋島原誠子次は理事鍋島侯爵夫人次は朴夫人次は李夫人次は錫鍵殿下次は理事近衛公爵母堂次は理事山内侯爵夫人也

韓國特使の招待

我が愛國婦人會にては、今回來京の韓國特使李址鎔氏同夫人の一行を、本月十二日華族會館に招待して、歡迎會を開きたり、當日は總裁閑院宮殿下にも御台臨ありて、殿下の台旨を奉じ會長より歡迎の辭を陳べられ來賓總代李夫人より誠意を込めたる答辭ありたること、別項記載の如し、從來李夫人始め、韓國の貴婦人が我が愛國婦人會の爲に熱心盡力ありしは、本會の夙に認めて、深く其厚意を謝する所なるが、是れを機會に今後一層の盡力あらんことを希望し、尙彼我婦人間の交際を益々親密ならしめ、我國より多數の婦人の渡韓せるが如く、彼國よりも續々婦人の渡來ありて、我が文明の實際を見、女學校にも入學して、一日も早く韓國全體の婦人が、新文明の生活に入るに至らんことを切望するものなり。

歲暮

三十九年も此間迎へたるやう思ひしに、月日の流るゝは矢よりも速くて、何時しか年の暮とはなりぬ、人間の命には限りありて、長くて百年、七十も古來稀れなる方なり、一日立てれば、一日後が減る譯なれども、皆が皆、他人は死ぬるが、自分だけは死ぬるものにあらずと思ひ、千年萬年も生る積りにて、一向平氣なるが、胸に打つ心臟の鼓動は、墳墓に急ぐ早鐘と思へば一日は愚か、一秒にても惜しきものなり、ロツクフエラー、モルガンの富を以てするも、時間は一秒も後へ戻す譯には行かず、年の暮れとなりて、今更立つた一年が惜まるゝ、されど日頃充分働きて、振り顧みたる一年に對して面目あるを覺ゆるの人は、誠に結構にて、歲暮が最も快く送らるゝなり、丙午だとて騷いだ今年も、過ぎたる通りの年にて、目出度きもあり、目出度くなきもあるべし、孰れも過ぎた事なれば、仕方なしとして、來年は目出度き者は一層目出度く、目出度からざりし者は、目出度かりし者よりも、更に目出度くなれかしと祈りて、こゝに今年を送るものなり。

尙本年は我會の事業も大に發展し、本年一月の會員數は四十五萬七千餘人なりしも十二月には五十萬九千餘の會員となれり、之れ畢竟職員幷に會員相互の奮勵努力の結果に外ならず、而して本年發表せし會員大募集の計畫も明年を以て完成を期するの豫定なれば、明年は尙一層の努力あらん事を希望して止まざるなり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

論叢

現時の女子教育

文部省視學官　大島義脩

▲不完全なる進歩　現時日本に於ける女子教育は、著しく進歩して居ると何人も想像して居る、又實際女學校の數も殖え、教育を受ける女も多く出來たから、昔に較らべると進歩して居るかも知らぬが、自分の考へては今日の現象を以て完全なる進歩とは認めぬ、不完全なる進歩と云ふの外はない、何故なれば試みに現時の教育を受けたる女子を見るに、其主婦となり、學校教員となりて如何なる働きを爲しつゝあるかと云ふに、腦髓は殆ど働いて居らぬのである、技藝を授くるのみの學校なれば左程腦を使用することを敎へる必要もないが、苟も智識を授くるの學校に在つては、今少し腦の働きを充分に爲すの女子を作るにあらざれば、教育の進歩と云ふことは出來ない。

▲女子の天職　今の日本女子は主婦となるを以て天職となして居るから、これに適當したる教育を施さねばならぬ、男子は元來智に於て勝り、女子は天性情に於て勝つて居るから、其教育法も男女同等では行かぬのである、即ち女子には成る可く智育の發達するやうな教育を施し、感情を適當に抑壓する方法を敎へねばならぬ、これ即ち頭を活用せしむる基である、假令ば女學生が學校で料理や裁縫を敎へられ、正則の方則は知つて居るから新らしい反物で衣服を縫ふとか、或は料理室を整へて澤山の材料を集めてさへ置けば、相當に立派な料理も作くれるであらうが、廢物を利用するとか、足らぬもので體裁よく間に合せるとか云ふ點は、大に缺乏して居ると思ふ、單に經濟の方面から云ふても、數多き女學生が悉く家計裕なる家に嫁入ることは請合はれぬが、手腕のある主婦なれば貧しき家でも相應に生活を維持して行かれるものである、故に何れの方面から見ても、女子に活學問を授けるやうでなければ、決して完全な女子の出來る筈がないから、家庭と學校と相待つて一歩進んだる教育を施すことが目下の急務かと思ふ。

▲新教育の中毒　併し又此に大に注意せねばならぬことは、所謂新教育の中毒に罹かる女子の輩出することである、勿論女子も男子同等の教育を受け、智育の發達と共に社會の表面に活動をなし、或は專問の業務に從事して各自の天才を發揮することは決して不都合はありませんが、新教育を受けたる女子には往々變形男子然たるものを見ることがあります、人生男女を區別さるゝ以上は進歩發達と共に益々男子は男子らしく、女子は女子らしくなるべきでありますが、若し女子にして自己の本分を忘れ、男子の權利内に侵入せんと企つる等のことあるに至つては、即ち新教育の中毒に罹りしものと云はねばならぬのである、兎に角自分の考へては、女子は飽くまでも女子の美點を維持し、女德を保ちて女子として當然働くべき範圍内に於て、充分に活動せんことを希望するのである。

▲女子と虛榮心　人間は男女を問はず誰しも相當に虛榮心はあるが、殊に女子は男子に比して一層此弊が甚だしいと思ふ、第一衣服の美を競ふことは勿論であるが、學校等の撰擇にしても、如何なる學校が自己に適するや否やの利害を問ふよりも、先づ名義のよい所に眼を着けると云ふ有樣である、例令ば女子大學に入學せんと思ふものは、内容の如何を問ふよりも先づ名稱の大なるに心醉して生徒となり、卒業生となりて世に誇らんとするの分子を多少含むで居る女子が無いとは斷言することは出來ぬかと思ふ、斯かる傾向が凡ての方面に向つて現はれて居るが、畢竟女子の心理作用は情が大部分を占めて居るから、理に於て善惡の判斷をなすより、情の向く所に從ひ易いのかと思はれる、故に男子の教育より一層注意を要するは女子の教育であると思ふ。

歳まさに暮れむとす、吾等はこの一年間讀者諸姉の深厚なる愛眷の下に、微力ながらも前年に比して一段の進境を認め、心竊かに歡喜の情に耐えず、是れと同時に諸姉が舊に倍して更らに本誌に深き〳〵愛顧を垂れ給はむことを祈り、本號を以て本年の終刊となし、こゝに聊か來るべき新年第一日發刊に登載すべき重なるものを紹介せば

世界婦人くらべ　法學博士　山田三良
家政は如何に行ふ可き乎　侯爵夫人　鍋島榮子
家庭衛生　ドクトル　川瀨元九郎

現代婦人の長所と短所　現代名家の說

新曙光（小說）　三島霜川
姫君（傳記）　片上天弦
新年宴會（お伽噺）　江戸靜川

を始めとして、論叢、家政、社會の各欄はます〳〵改善して名流大家の高論卓說を以て塡充し、諸姉が詩嚢の紐を解いて山の如く寄せられたる和歌

新年　佐々木信綱氏選

及び短文、新體詩は花よりも美はしく紙上に匂ひ、數十面の挿畫は美を盡し麗を極むるのみならず、毎號添附し來れる寫眞版附錄の如きも、本誌大額面用の尤も得難き逸品を選べり、請ふ如何なる新裝をもて諸姉に見るかを待て

瑞西の赤十字會議

法學博士　秋山雅之介

▲日本の位置　私は本年六月瑞西ゼネバに於て開設せられたる萬國赤十字會議に本邦政府を代表して出席しましたが、萬國會議は國家的のものでありまして、萬國赤十字條約加盟の列國三十六ヶ國が各代表者を出して、赤十字條約を改正しやうと云ふのであります、由來外交團には強國にのみ勢力がありまして、六大強國即ち英、露、獨、佛、米、墺の六ヶ國が世界の覇を握つて居つたのでありますが、日本も此度の戰爭で強大國の仲間入りをなし、會議中四個の分科會がありまして、其分科會の副議長に加藤公使を撰出し、又條約文起草委員の一員に私も撰ばれましたが、日本國の代表者として一言一行にも重きを置かれ、會議に於ける重用なる言論として聞かるゝに至つたのは、全く戰勝の賜であります。

▲日本の推稱　日露戰争に於て、日本がゼネバ條約を善く守つてこれを行ふたのみならず、夫れ以上に人道的行動を取つたこと、幷に赤十字社の働きや愛國婦人會の働きの如きも、吾々委員が別に吹聽する迄もなく、各國の公法學者は能く之れを認めて居て、露國の代表者さへ日本の遣り方を推稱した程であります、故に日本からは別に提案は出しませんが、問題に對する決定議の内容は多く日本の主張する處に同意されました。

▲日本と歐洲　私は十年振りに歐洲に旅行したのでありますが、日本と歐洲とを比較して見ますと、日本は段々とハイカラとなり、歐洲は其反對にジミになるやうに思はれます、倫敦でも十年前は高帽子にフロックコートが多く見えましたが、今日では丸帽子が多くなつて居ります、其他日本では西洋物が新らしい爲め之れを眞似る人が多いが、西洋では日本物を珍らしがつて、日本固有の物品は何品に依らずこれを稱贊します。

▲日本家屋　西洋人が日本へ來て稱贊するのは、西洋家屋の建築より、日本家屋の建築であります、畏れ多きことながら、皇居に於ても京都の舊御所を非常に稱贊して居て、西洋建よりは日本建の方が神聖にして高尚であると稱贊して居るものが多い、佛國に於ける日本大使館は目下新築中で明年三月頃落成する都合でありますが、其裝飾等は總て日本固有の物を用ゐるとのことでありますから、定めて目を驚かす程の物が出來ることゝ思ひます、要するに日本人は日本固有の美風を專ら發達せしめて、外國の眞似を爲さず、外國をして日本を眞似しむると云ふ大抱負を有つことが必要であります。

總裁殿下にしたがひ參らせ山梨なる支部總會へものしける時に（上）

評議員 伯爵夫人　阿部篤子

▲汽車中にて

數多きほらのやみ路のひま〳〵に　みるそ樂しき山水のさま
よく見んと心にかけしさるはしも　またゝくひまに打過にけり
こゝかしこ木々の紅葉染なして　山のけしきのおもしろきかな
四十あまり八つのほら路過はてゝ　かひの國へとつきし嬉しさ
日の丸のみはたふりつゝをさな子か　むかふるさまのいさましきかな
賑かやにほしつらねたるもろこしの　いろうるはしくみえわたる哉

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

春風

小川未明

春とはいへ、寒空に薄紅を流した夕暮の風は、ひた／＼と衣の袖を拂つて、銀座通りを歩いて來かゝると、いつしか夕日は雲の彼方に落ちて、長へにうら若き自然の微笑みと、悲しみと、人生の憧れと、戀とは、そゞろに西の、海また灘を越えて、沈默の領土に雲の旗手を燒く、夕燒を見るたびに思はしめて胸の躍る。河岸を見下して、漕行く舟の往來や、橋の上を織るがやうに行く美しい人の姿を見るにつけて、もはや此世は春の、花の色香ぞする。ほんのりと白壁に映る餘炎の影に、いつしか朧夜の春の月も思ひ浮べられて、歩みはいそ／＼と何時になく夢心地で歩いて來た。

偶然ある。人形店の前に立つて、暫時、取り亂した、紅、紫、百合の花や、薔薇の香ひや、それは／＼目も醒めさうな、煌々とした燈火の、硝子板の上に流れて、町は宵の口、其の前に歩みを止めるものゝ多い中で、お蔦は恥と、其の店頭を覗き込んで、ありし十餘年前の我が身のことに思ひを及ぼした。

あゝ、あの時分の、子供の時が戀しいてと……

雪遙かに二百里、田舍の町に、學校へ往來の道すがら、お蔦は或る人形屋の前を通つたのである。其頃、都から來た箱入の人形が、一つ其の店頭に飾られてあつた。お蔦はいつも其の店先を通るたびに、其の人形が欲しくて、どうかして買つてもらひたいもんだと、それが日頃の願ひであつた。しかし貧しい父母に何で其のやうなことが望まれやう。彼女は無言に其の人形を戀し、夢み、愛しんで、とう／＼三年の間、都へ來るときまでも其の人形のことを思ひつゞけてゐた。……あゝ、今頃は誰の手に、あのお人形は入つたらう。……など、來てからも幼な心に屢々思つたこともある。

されど美しい詩歌の、空想の時代は東の間であつた。其後お蔦は浮世の潮風に吹かれ、磨かれて、今では色香豐に、黑髮の房々に、眸に漲る愛嬌の海に紅顏の少年を溺らしむる。されど生れた故鄕を忘れることはない。

誰しも身に浸むものは初戀の歷史であらう。はからずも今宵、ひよつとした氣の機で『あんなお人形を見たばつかしに、小供の時分のことを思つてさ。あゝ、なんて馬鹿げたことまで考へるんだらう。ちえゝ、焦れたいこと。』と日和下駄の齒も折れよと、石を蹴返して、道を急いでもない。

＊　＊　＊

氷柱の垂れる軒端に、朝日の照渡つて、凍つた雪の上て、靑い大空に凧を飛ばしてゐる、子供等の群がある。遠く、近く藤の音は勇しげに鳴り渡つて、嵐は颯々と吹き、耳もちぎれさうに寒い朝、二人は睦じげに町中を、いつものやうに語らひながら、二郎は辨當を振り、お蔦は習字帖をぶら下げて、また例の人形屋の前に差しかゝる。お蔦はまた立止つて、熱心に燃える眸を人形の上に注いだ。て、口の中で『あの、お人形欲しいことね、妾、あのお人形ほんたうに可愛わ。』といつて、茫然と眺めてゐると、『お蔦ちやん、またお人形見てゐるの、行かうよ。もう遲いんだぜ。』と二郎が呼び掛ける。

『二郎ちやん、まあお待なさいよ。妾、今行くわ。』

と、お蔦は驅けて追ひ付く。て、二人は大空に呻吟る凧を見上げながら、町を通り過て學校へ行つた。冴え／＼した南の空は、橙色に黄ばんで、山又山の、あの彼方が東京であるさうな……

『あつちなのよ、二郎ちやん。妾、東京へ行くんだつて、母さんがいふてよ。』

『え、東京へ？ 蔦ちやん、行つて何時歸るの……』

『それは、分らんわ。どうせね、妾の家は貧乏なのだから、行くらしいのよ。』

『厭だ！僕、寂しくなるもの、蔦ちやん行かんでゐておくれよ。』と泣き出した。

年にもませたお蔦は、年下の二郎を撫恤つて涙ながらに言つた。

『妾し行かなくつてよ、行かなくつてよ、ねえ、二郎ちやん、妾、行かないのだから、泣かんでゐておくれよ。』

『僕、母さんに願つて、あの、お人形買つてもらつて、お蔦ちやんに上るわ。』といつて、倘も二郎は泣きつゞけてゐる。學校の門を入りにかゝつた時、彼方で見てゐた誰かゞ、

『やーい。』と、囃したてたものがある。

『さあ、二郎ちやん泣かんでお行き、學校から歸つたら遊びませうねえ、左樣なら。』とお蔦はわざと後に遲れて、來かゝつた自分の友達と共に笑ひながら、門を入つた。

其の明日、泣くお蔦は、無理やりに引立られて怪しげな男と共に、汽車に乗せられて戀しい故鄕を後に見殘して旅立されたのである。

＊　＊　＊

思へば十餘年夢の一昔！

今彼女が涙に……故鄕の森や、流や……彼の人も、……彼の家も……人形屋の店！學校の門！空飛ぶ凧！の……浮んで、あり／＼として見え、動き、叫び、躍る。

彼女は始めて哀しさの餘りに泣いた……幼見の昔の、優しい眞情は再び發した。

戀知りて夢に夢見る春の暮。……まだ梅の蕾は堅い。ほんのりと暮れ初めた空に、眞珠のやうな星影は閃めき、何處やらで爪彈の音色低う。

派手やかなお蔦の姿は、いつしか寂しい路次の間に消えてしまつた。いづれ行く先は……。身にしめども春風ひとしきり。

（完）

東西名婦傳

土肥實平の妻

須藤求馬

土肥實平が妻は、生れつき才智すぐれて、慈悲深く、同情に富み、婢僕等にもよく憐をなせしによりて、男女皆共に忠節を思ひて疎かにせず、實平折にふれ物荒き行あらば、常に諫めて家よく治まれり。

然るに、兵衞佐賴朝兵を擧げられし時より、是に與みして忠節を盡しけり、初め兵衞佐の大事を企てられし時、實平は兩端を持して狐疑し、案じ煩ひけるを、此妻諫めて、夫れ東國は皆これ源氏の御家人ならずといふ事なし、時勢に任ずる習ひなれば、一旦平家に從ふ謀こそ幸ひなれ、今源氏の大將すでに時を得て旗を擧げたまふ、平家は奢を極め人望に背く、佐殿は其人と爲り、威ありて猛からず、籌ありて天下を治むべき器量ありと承りぬ、急ぎ味方に參りて、大功を遂げたまへと申せしに、實平げにもと大に感じ、その子遠平と共に佐殿に參りぬ。

かくて佐殿は大場梶原と戰ひ、敗軍して土肥の杉山に隱れ、糧食盡きて飢渴に臨みたり。時に土肥の妻は、郎黨一人髮をそらせ、僧の姿に出たゝせて、簀の中に食糧を入れ、上に樒を覆ひ、あかの水桶に酒を入れて、行人法師の花つむよしにもてなし、忍び／＼に贈りければ、杉山を取圍みける敵兵も見とがむことなし、是故に兵衞佐命恙なく、隙を窺ひ杉山を出て走りたまへば、土肥が妻は文認めて三浦畠山が軍の樣細々と書しるし、安房上總の方へ三浦の一族下りし事まで申越したり、伊東入道が土肥の村里を燒拂ひけるより、實平が妻は所緣につきて眞鶴の邊に隱れ居たり、幾程なく空しくありぬ。佐殿此文見たまひて計策をめぐらし、安房上總を服さしめ大軍となり、遂に平家を攻め亡したりけり。

此妻の智謀群に出てすぐれたる事は、實平が兩端を持して決せざるに勝敗の是非を論じて決斷し、良人をして功名を遂げしめ、賴朝の覇業をなさしむるに至りて、此妻も亦與りて力ありといふべし、誠に閨中の秀なる哉。

▲龜井純子樣　俳句句當選につき繪ハガキ差上度候間至急御住所御知らせ被下度候

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

主婦の資格

男爵 松平正直

▲主婦と慈善心　主婦としての資格中には澤山の要件がある、即ち學識、藝術、家政の整理、婢僕の使用法等一々數ふるに隙あらずと云ふて宜しい位であるが、自分の考へては是等凡ての點に於て勝れても、慈愛心に乏しいものであつたなら、主婦としては皆無資格の無いものと斷定するとが出來ると思ふ、一家の調和、家庭の和樂も只慈愛心に富む主婦の力にのみ依りて保たれるのである。

▲思想界の變化　近時女子敎育の進歩と共に、智識の方面に於ては余程婦人の天才が發揮されて居るが、婦德養成の點に至ては知識と並行して居らぬことが、現今婦人社會の狀態であると思ふ、勿論澤山の例外もあるが、概して昔の婦人に比して奧床し氣が失せて居つて、同時に仁愛等の德が多少薄い樣に思はれる、併し是は時勢に伴ふ思想上の變化とでも云はうか、下女までも昔と今とは其氣風に於て大差あることは、經驗を有するものの等しく認めて居る所である。

▲今昔の下女　維新前の頃に奉公に出るものは、餘程主家に重きを置いたものである、然るに近頃の下女は始めから腰掛位の考へのものが甚だ多い、先づ一ト月か二た月居て面白くなければ、他へ轉ずる位の心で雇はれて來るから、主家に重きを置く樣なものは稀有である、故に自然給料分の仕事をすると云ふ樣な傾きとなり、主家と婢僕との間に更に溫情と云ふものがなく、下女は只金次第と云ふ如き有樣に立ち至るは自然の勢で止むを得ぬ次第であるが、單に婢僕の此る心掛も、延いては一家の和樂の上に影響を及ぼすから、主婦は是等に對する方法に就ては、充分考へねばならぬことと思ふ。

▲仁愛と感化　孔子も仁は五常の始と說き、佛敎の慈悲、耶蘇敎の愛と云ふも、歸する處は皆慈愛の心を說いたのであるが、眞に仁愛の德程感化力の强いものはない、故に例令ば下婢等に對しても、主婦は充分の親切と同情を以てこれを待遇し、婢僕をも家族の一員として、見るの心掛を常に有して居るなら、無言の內に感化され、自然內心から主家を大切に思ふ樣になる、即ち慈愛心は日光の如きもので、萬物を發育せしむるから、敗德者も仁愛に富む婦人の力によりて、改められし例が澤山ある、殊に子女の敎育には著しく結果が現はれて居る、勿論母として子供を愛さぬ者もないが、偏頗な愛して姑息の慈愛等は、子供の一生を誤らせるから、婦人としては兎に角高尙な仁愛の德を養はねばならぬ、是れは只一家庭に必要なるのみならず、社會國家の上にも多大の影響を及ぼすことである。

▲根本と枝葉　要するに主婦としての資格となるべき根本は、唯慈愛心であつて、他の諸技藝は皆枝葉である、即ち學識、技藝、手腕等も慈愛心と云ふ基ありてこそ、始めて活きて働き、是等が應用されて、益々其人の光輝を發揮するのである、故に婦人の命、即ち主婦たるの最大要件は、唯此仁愛の德であると思ふ。

家庭の炊事に瓦斯の應用

東京瓦斯會社營業部長　河合芳太郎

瓦斯の四德と申しますのは、第一淸潔である事、第二安全である事、第三輕便てある事、第四經濟である事てあります、第一の淸潔であると申すのは、薪炭を用ゆる時は家が眞黑に燻つて仕舞ひますから、新らしく建てた邸宅を永く美しく保存するには、是非とも瓦斯が必要かと思ひます、第二瓦斯の光は陽氣て、且つ風にも耐へますが、只裸火てあるから危險てあるとか、又は瓦斯が洩れた時は非常に危險てあるとか申す人がありますが、ネヂさへ閉めれば直ちに消へまして、後まて火焰の殘るやうなとはありません、又燃えない瓦斯が洩れる時は臭氣が出ますから、危險を豫防することがあります、第三の輕便なる事は、申すまでもなく一本のマッチさへあれば直ちに熱を起し、三升の御飯も僅かに十八分て出來上ります、第四に瓦斯は物を煮るにも時間がかかりませぬから、時間の經濟にもなり、輕便な爲に三人の下女は二人居ても、臺所は調ひます、且つ三升の御飯を焚くに要する費用は、僅かに金二錢弱で濟みまして、薪炭よりは經濟てす、九人家內の家庭ても、臺所用に費す一ヶ月の瓦斯費用は大概二圓七八十錢て濟みます、これは實際使用されたる奧さんからの報告てあります、斯樣に便利なものも、從來ては上流以上の家庭の外は應用が出來ませなんだが、一般の家庭が平等に其便利に浴せらるゝと云ふことが必要てありますから、本年の四月よりして布設費用は總て會社て負擔することに致しまして、只瓦斯七輪を買求めらるゝなれば（此價格凡九十五錢以下）それて飯も出來、菜も煮ることが出來ると云ふことになつて居りますから、今日は餘程多くの家庭臺所に應用せらるゝやうになりまして、布設が間に合ひ兼る程であります。

凡そ何事ても新らしき事を始める時は最も注意を要することてありまして、薪を瓦斯に代へたから、直ちに經濟になると奧さん方が袖手して下女に計り任して置いては、頗る不經濟のことになります、瓦斯は焰の先が最も火勢の强い處てありますから、充分に瓦斯を出しますと、焰の先が往々外部へ出て火勢が盛んなる割合に、煮焚物の爲になりません、大概六分位ゐ栓をネヂて置きますと、器物の底へ强い火勢が當り、煮焚物が早く出來ます、其邊の加減は、主婦たる人が十分に注意して、下女に敎へ込むやうにしなくては、反つて不經濟になります。

▲家事實驗談を募る

一　家政の實驗談なれば、文を飾るに及ばず、有の儘を記されたし
一　記事は相成るべく簡短に、文字は明瞭に認められたし
一　坊ッちやん孃さんをお育てになつた實驗談、有の儘を記されたし
一　記事は相成るべく簡短に、文字は明瞭に認められたし

食器に就て

秋川生

食器と云へば、其意味が甚だ廣いけれども、私共が平生の汁其他種々の菜などを調理するに用ゐては、火の通じは早し、體裁も見惡くからず、唐銅鍋の如きは最も便利なる物の一つてありませう、併し此唐銅は、銅や鉛と同じく有毒なる金物てあるので、近來世人が此事に就いて多くの注意を拂ふに至つた樣てはありますが、尙鍋の內面に白鑞（ハンダ）を塗るときは、其害を免れ得る事と考へて居らるゝ方が少なからぬ樣に思ひます、抑々白鑞の中には多くの鉛を含んで居ります故、之を塗布たる器にて鹽氣又は酢味ある食物等を取扱ふときは、次第に其鉛は溶けて人體に害を及ぼすものてあります、故に唐銅製又は銅製等の食器には將來必ず白鑞を用ゐず、錫の純粹なるもの、即ち純錫を以て其內面に塗布く事を怠らない樣に願ひたい、一家の主婦たり、一家幸福たるべき婦人諸君に對して、主婦の爲め特に之が注意を希ふのである、否國民體力の改善上一臂の力を借りたいのてあります、純錫は白鑞よりも幾分か價は高いけれど、藥を枕邊に並べて一口、一ヶ月、果ては己が生涯を褥中にうめき了るに比べたら、少しも惜しむに足らないのてあります。

尙一つ注意すべきは、近來亞鉛の用途が漸く廣まつて、勝手道具、殊に御飯蒸などにまで往々用ゐられて居るのを見受けるのてある、併し此の亞鉛なるものも一種の毒有る金物てありますから、水を入れて火に懸ける所は亞鉛を以て作くるとも、御飯に接する部分丈は木製か何かにする樣に御工夫を願ひたい、凡て一ツや二ツの食器を改めるなどには、別段費用を要する譯ても無いのに、世人は尙之を面倒と思ふてか、將た其害毒を知らないのか、兎角不注意の樣てある、重きを置かない樣てある、一食の饍を節すれば直に御飯蒸の改良も出來、一尾の秋光魚の代價も尙能く鍋に純錫を塗付くに足る譯てはありませんか。

前述の如き次第なれば、一家の爲め將た一國の爲め、直に自己の家庭に省みて、若し不安心なる食器あらば、速に改良の策を取られよ、私共をして遠慮なく言はしむれば、唐金鍋等を用ゆるより、寧ろ安全なる鐵鍋を用ゆることを願ふのてある、鹽氣ある食物を純錫の剝げた鍋などに長く容れて置く事の如きは、殊更危險の業てあります。

總裁殿下にしたがひ參らせ山梨なる支部總會へものしける時に（下）

評議員 伯爵夫人　阿部篤子

▲山梨にて

やことなき君かいてましよろこひて大路せきまてつとふひと〳〵

國の爲盡させたもふみこころにそてしほるらんおいもわかきも

▲總會の時に

空はれて風もおこらすにきはしくけふのまとゐの果し嬉しさ

▲提灯行列のつどひし時に

みこゝろをなくさめんとてともしひに赤き心をあらはしにけり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

愛國婦人會記事

◎新年互禮會　例年の如く新年互禮會は月九日開會の事と定まる

◎徽章佩用規則改正　本會徽章佩用規則第五條但書を左記の通り改正したり
但し水火盜難等に罹り其事實明確なるものゝ外相當代價を徵集す

◎支部會計記帳例　左の通り定めり

第一條　支部は左之主要簿表を備ふるものとす
一、金錢出納牒
二、總勘定原牒
三、計算表

第二條　總勘定原牒には凡左の科目別に依り整理するものとす
但左記の外必要の場合は適宜科目を增設する事を得
一、基本金　總ての基本金へ組入べきもの
二、會費　醵集總額を受入とし年末決算するものとす
三、賛助金　前に同し
四、當座預り金　寄附金の本部納歩合又は本部よりの救護金を一時受入のものゝ如きもの
五、雜收入　支部經費に宛つべき預金利子其他
六、徽章再渡代　毎年決算のとき本部に納付すべきもの
七、有價證劵　公債々劵等
八、銀行定期預金
九、銀行當座預金(或郵便貯金預け)
十、假出金
十一、動產不動產　所有土地家屋器具等
十二、救護資金　支部救護金の出納
十三、支部經費　會費賛助金の歩合幷に年末雜收入を此の科目へ受入諸費に宛つ
十四、幹事部經費　幹事部會費歩合交付のとき記入す
十五、募集諸費　會員募集に係る諸費
十六、支部事務費　諸般の事務に屬する費用
十七、總會費
十八、諸經費　事務費其他の名稱に組入る能はざる特種の費用
以上十四項より十八項までは年度末に支部經費にて決算す

第三條　事業費(廢兵遺族救護の爲め設けたる各種事業費)は特別會計とし別に適當なる牒簿を備へ整理するものとす

第四條　計算表は少なくも每月二回必調製するものとす

第五條　第一條の簿表の外會費整理簿の如き其他適當の補助簿を備へ整理を確實にするものとす

第六條　記牒は一年度間の受拂共累計記牒し年度末に於て總決算を爲すものとす(帳簿例略す)

◎韓國特使歡迎會　去る十二日華族會館に於て韓國特使李氏一行の歡迎會を開催せり來賓の主なる人は伊藤統監始め特使李址鎔同夫人李鈺卿漢城府軍朴義秉同夫人朴柳卿徒從院副卿宋秉畯內務會計局長金寛鉉及鶴原韓國委員本部長村田少將金山統監府書記官等十四名にして主人側にては本會總裁閑院宮妃殿下會長岩倉公爵夫人理事近衞毛利鍋島山内の各公侯爵夫人評議員には寺内陸相夫人長谷川駐韓軍司令官夫人佐々木伯夫人以下東京支部幹事其他本會顧問伊東海軍元帥浦樞密院顧問官岡部子爵等を合し百三十七名出席し一同着席の時を計り岩倉會長は左の歡迎文を朗讀せり

時維れ明治三十九年十二月十二日久子等本會總裁閑院宮載仁親王殿下の台旨を奉じ本會員六十萬の姉妹を代表して爰に我が最も敬愛せる韓國特使李址鎔閣下令夫人並に隨員朴義秉君夫人等を歡迎するの光榮を荷ふは何の喜びか之に若かん曩に我韓國本部は伊藤統監閣下援助の下にいと盛大なる發會式を擧行せらるゝに至り李令夫人等卒先盡力以て大に韓國婦人の賛同を奬勵せられたるを聞き久子等深く感激して措く能はざりしに圖らざりき今や幸にも令夫人等特使と共に來遊せられこゝに滿堂藹々たる和氣の間に立ちて親しく感謝の誠を致すを得んとは

庶幾くは將來益々本會の隆盛と共に兩國同胞姉妹友愛の情彌々濃かならんことを終に謹て來臨を辱うせる特使閣下を始め御一行の健康を祈る

愛國婦人會會長公爵夫人　岩倉久子

右了るや特使李址鎔夫人は日本語にて左の答辭あり

本日は總裁殿下御臨場の上特に私共の爲めに此盛大なる歡迎の宴を御開き下さいまして又只今は會長夫人より御懇篤なる御詞を蒙り私共の光榮は此上もないことで此御禮は到底此處で申盡すことは出來ません私は此光榮を得ましたに對して歸朝の上は皆樣の御主旨に依りて及ぶ限り我國婦人の啓發誘導に力を竭す考で御座います何卒私の志望を遂ぐることの出來ます樣尚貴婦人方の御盡力を願ひます茲に謹て總裁殿下の御健康を祝し併せて此會の益々盛となり又會員諸孃の御幸福を祈ります

右畢りて一同午餐の饗に移り近衞軍樂隊は始終嚠喨音樂を奏し午後一時頃より太々神樂の餘興に移り主客歡を竭し午後三時過ぎ散會したり當日李址鎔夫人李鈺卿及朴夫人朴柳卿の兩來賓は伊藤統監より寄贈されたる裾模樣の日本服を着し李夫人は岡部子爵夫人之を助け朴夫人は鍋島子爵夫人之を助け式場に入られたるは最も美しかりし

◎韓國委員本部規則左の通り定めたり

第一條　愛國婦人會韓國委員本部を京城に設き委員部を各理事廳所在地に置く
委員部の所轄區域は各理事廳の所轄區域に從ひ部名は其の所在地名を冠稱せしむ

第二條　韓國本部長及び顧問(男子)は　總裁之を囑託す
韓國本部相談役(男子)は本部長の推薦に依り　總裁之を囑託す

第三條　韓國委員本部に左の職員を置く
本部長　一名
本部長は會長の意嚮を承け本會の定款に則り韓國本部及び委員部一切ノ會務を統理す
本部副長　名以内
本部副長は本部長の推薦に依り　總裁之を囑託す
本部副長は本部長を補佐し本部長事故あるとき其の職務を代理す
評議員　若干名
評議員は本部長の推薦に依り　總裁之を囑託す
評議員は本部長の諮問に應じて重要の事項を審議す
主事　二名
主事は本部長之を囑託す
主事は本部長の命を受け庶務會計を主掌す
事務員　若干名
事務員は本部長之を任免す

第四條　委員部長及顧問(男子)は本部長の推薦に依り　總裁之を囑託す

第五條　委員部に左の職員を置く
委員部長　一名
委員部長は本部長の命を受け各所定の區域に從ひ部務を處理す
委員　若干名
委員は委員部長の推薦に依り本部長之を囑託す
委員は委員部長の命に應し部務を幇助し又部內の維持擴張に勉むるものとす
事務員　若干名
事務員は委員部長之を囑託す

第七條　韓國本部委員部長會務の事項は本會支部規則に準す

第八條　韓國委員本部細則は愛國婦人會支部規則に準據し本部長に於て之を定め會長に報告し承認を受くるものとす其委員部細則は本部長便宜之を定む

◎韓國支部會費其他配當法　韓國委員本部に於ては其會費よりして韓國軍人の廢兵幷に戰死者遺族の救助に充て又韓國在住の日本軍人の廢兵幷に戰死者遺族に救護金を配布する事に定められたり

愛國婦人會々員數並に女子人口比較表（明治三十九年十一月末日現在）

支部名	特別會員	通常會員	合計	女子人口（三十六年末）	女子人口百人ニ付會員ノ比例	賛助員
石川	一、九九八	一九、五九一	二一、五八八	三八五、四七八	五、六〇	一、七九五
山口	八四二	二六、二一八	二七、〇三四	五〇六、九二〇	五、三三	七九
山形	九一〇	一八、二七一	一九、一八一	四三八、六一八	四、三六	一四三
岡山	一、〇三一	一九、六四二	二〇、六七三	五七七、二七二	三、五八	三六三
愛知	一、二三六	二八、九二三	三〇、一五九	八六八、五三八	三、四七	六三一
福岡	二、五三三	二三、九〇〇	二六、四三三	七七二、七四五	三、四二	一、九五四
北海道及函館	三、一二〇	一四、二一六	一七、三三七	五〇七、六三八	三、四二	二、〇七四
熊本	二、八六〇	一六、九六五	一九、八二五	六一〇、四一一	三、二五	一、三〇二
秋田	八四八	一二、〇三一	一二、八七九	四〇三、九四六	三、一九	三八五
京都	二、一八四	一三、九三六	一六、一二〇	五二一、三九五	三、〇九	三七一
香川	八三〇	九、七一四	一〇、五四四	三四七、八九〇	三、〇三	三五一
富山	八三五	一〇、七三二	一一、五六七	三八四、九八二	三、〇〇	六四二
群馬	一、五〇四	一一、九七四	一三、四七八	四五四、一七一	二、九七	二二三
兵庫	二、〇四一	二五、九六三	二六、〇〇四	八九三、七三四	二、九一	四九四
長崎	三、二七一	一〇、一六六	一三、四三七	四八九、三五〇	二、七五	五二
宮城	一、四四六	一〇、一六〇	一一、六〇六	四四五、〇四七	二、六一	七〇七
青森	一、一一一	七、二六〇	八、三七一	三二二、二一一	二、六〇	四二六
愛媛	三七五	一二、六四四	一三、〇一九	五一一、三九六	二、五五	二九六
島根	三一六	八、八四八	九、一六四	三六二、六二五	二、五三	四〇三
大分	八〇二	九、五五二	一〇、三五四	四三〇、〇二五	二、四一	四四五
神奈川	一、四八七	一〇、四一五	一一、九〇二	四九九、六二三	二、三八	一
佐賀	八四三	六、八〇〇	七、六四三	三二七、六七八	二、三三	二〇七
三重	四〇〇	一〇、八九四	一一、二九四	五二二、〇四三	二、一六	三四六
奈良	二八七	五、六七〇	五、九五七	二七八、二九一	二、一四	三二一
宮崎	二五八	五、〇一五	五、二七三	二四七、二五二	二、一三	四四七
高知	二五五	六、四一三	六、六六八	三一八、二四五	二、〇九	六一一
福井	七〇五	五、九四二	六、六五一	三二〇、一五四	二、〇八	九八八
岩手	六六三	六、九〇〇	七、五六三	三六九、二七八	二、〇五	一九七
福島	一、一七九	九、六三四	一〇、八〇九	五八二、一五六	一、八六	五四五
德島	三四〇	六、一五三	六、四九三	三五二、六〇八	一、八四	八四
滋賀	三八四	六、一三〇	六、五一四	三六四、六八八	一、七九	七三四
東京	七、四八六	一二、六三七	二〇、一二三	一、一五七、五一四	一、七四	二、五〇五
千葉	一、〇〇一	九、六九八	一〇、六九九	六五六、七八二	一、六三	二七
大阪	二、六八四	一〇、六〇二	一三、二八六	八六三、四〇五	一、五四	一、〇二三
廣島	一、三八七	一〇、一四一	一一、五二八	七四六、六六五	一、五四	七一〇
茨城	五三八	七、七七四	八、三一二	六〇〇、四一三	一、三八	五六
山梨	三二五	三、一二四	三、四四九	二七二、一四八	一、二七	一三九
靜岡	五八九	七、一三五	七、七二四	六四〇、八四八	一、二一	七四
埼玉	三五六	六、六一〇	六、九六六	六二七、五五六	一、一一	三九二
鹿兒島	一、〇四四	五、五五三	六、五九七	五九四、九八五	一、一一	三三一
和歌山	二五九	三、二六一	三、五二〇	三五〇、〇六九	一、〇〇	三九二
鳥取	一六一	一、八九〇	二、〇五一	二一七、五四一	〇、九四	三七一
岐阜	六九四	五、九九二	四、六八六	五〇二、六五八	〇、九三	四二五
新潟	八四七	六、七二八	七、五七五	八九九、〇二一	〇、八四	八三七
長野	五二二	四、四一二	四、九三四	六七四、五一五	〇、七三	五七六
沖繩	三二七	一、三五一	一、六六〇	二三九、二二七	〇、六九	九二
栃木	二八四	一、八一九	二、一〇三	四五〇、一二六	〇、四七	一六三
臺灣	一、一九五	四、九二四	六、一一九	一、四〇二、七七一	〇、四四	八、八三四
海外	七三四	二、一二二	二、八五四			二、六七六
計	五七、三二七	四九二、四二六	五四九、七五三	二五、三一三、〇四〇	二、一七	三七、二三六

備考
支部名の配列は會員比例數の多きものより順次配列す
北海道及函館の兩支部會員數は合算して掲載せり而して函館支部會員數は特別四百八十九人通常千五百八十四人にして餘は北海道支部會員數なり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

子供の祈念

藤谷小波閲　高階柳塘譯

ある處に貧しい寡婦がありました、ある日の朝五人の子供を呼びまして、悲しさうに途息を吐いて「可憐さうだがお前達は今朝何にも喰べるものがないのだよ、昨日は商賣がなかつたのでパンを買ふ事も出來ず、それに生憎家には粉も卵もないから、何うする事もならないのだよ、だが神樣は必然救けて下さるから、今朝は辛抱をしてゐるのだよいゝか、神樣は富んでゐらつしやる、何でも出來ないと云ふ事はないのだから、それに神樣のお言に困難の時予を頼めば必ず助けてやると仰しやつて下さるのだから、お前達も神樣にお願い申せば必然助けて下さるに相違ないよ。」と申しましたので、子供達は母の言を良く聞きわけて何も喰べずに兄弟打ちつれて學校へまゐりました、一番小さな子供のクリスチンは漸く六歳になつたばかりでしたが、學校へ行く途でお寺の前を通りますと、門が開いてをりましたので、不圖お母さんの今朝云つた事を思ひ出して、サッサとお寺の中へ入り、敎壇の前に跪いて大きな聲で「天に在す父なる神樣よ、私等母子は今朝何も喰べる物を持つてをりませんから、何うぞお母樣や兄さん等が餓へませんやうに食物を與へて下さい、神樣はお金持ですから何うか私等貧しい者を助けて下さい。」と祈つて、而して其處を出て學校へまゐり、毎時の通り授業をうけて家に歸つてまゐりました、室の中へ入りますと卓の上に澤山のパンや粉や、大きな籠に鷄卵やお菓子がありますので、クリスチンは子供心に必然神樣が祈念を聞いて、それで下すつたのだと思ひまして

「ヤッ母樣、此樣にパンや鷄卵がありますが、こりや必然神樣が今朝のお祈念を聞き屆けて下さつて、神樣の天のお使が窓から持つて來て下さつたのでせう。」と申しますと、母は「ア、左樣だ、矢張神樣がクリスチン、お前のお祈念を聞いて下つたのだよ、これはね、今朝お前がお寺でお祈念をしてゐる時、奧にゐらつしやつた立派な夫人がそれをお聞きになつて、私等が可憐さうだつてね、これを悉下すつたのだよ、これも神樣がお前のお祈心を聞いて下すつて、あの夫人をお使によこして下さつたの、だからお前は神樣とあの夫人にお禮を云はねばなりませんよ、そして神は吾等を助け給ふものなれば、必ず神に身を捧げて信心怠りなきやうにせねばなりませぬ。斯云ふ言を忘てはなりません。」（おしまい）

母より娘への手紙

（泣く子の扱ひ方を教ゆ）

笠間醉雨

寒さ烈しう相成り候ところ、その許一同恙なき由、何より結構なることに御座候。次に此許一同も無事に暮し居り候まゝ、憚ながら御安神くだされたく候。さて太郎も追ひ〳〵生長いたし、この比ては餘程智慧もつき、また愛らしくも相成り候こと〵存じ、今更ならぬことなれど、この比頻に顏見たく、來春お前樣が上京なされ候節を待ち遠しくてたまらぬ位に候。さりながら、そなたよりの毎度の手紙に、太郎が蟲の故か、大層泣く癖のこれあり候てそが取扱ひ方に、ほと〳〵大閉口なされ居る由承り候が、よく〳〵その泣き方の性質を研究なされ候うへ、良きやうに御取扱ひなされ度これ祈り候。凡そ小兒の泣聲は一種の音樂と思ひ申さずば、迚も〳〵敎育は出來難きものに候。餘り泣くゆゑ終ひには自烈たくなつたとて投り出したり、又頭の一つも御見舞申すが如きこと是れあり候ては敎育はおろか小兒の生涯を過まるものに御座候間、かへす〳〵も御注意これあり度く候。泣き方には、病氣泣き、威し泣き、甘え泣き、臆病泣き、癇癪泣き、すね泣きなど種々これあり候が、その泣く場合と樣子とに由つて賺し方にも亦種々あり候。病氣泣きは其の原因たる病を癒さゞる以上は、止むること難かしく候へども、威し泣きは、自分の氣儘を通す爲め、故意と聲を張り上げて、ワン〳〵泣くものにて一番意地の惡いものに候ゆゑ、それに怖ぢて無理を通させることゆめ〳〵相ならず候、若し一度たりとも其の望を達せさせば、次第に我儘の增長して、終にはをさまりつかぬやうに相成り候間かゝる癖をつけぬ樣に致すこと肝腎に御座候、それゆゑ小兒が若し此の奸い手段を始め候節は、母親たるものは極めて嚴格なる態度もて「そんな聲位ではまだ〳〵だめです。もつと〳〵大きな聲でお泣きなさい」と、いつたやうな調子であしらひ候はゞ小兒は終に我を折つて仕舞ふものに御座候。すべて母親たるものは勢を強さうにいたし、顏をジロリと打ち眺め候へば、大抵は服從の意を表するものに候。あまえ泣きは、お菓子が欲しいとか、祖父樣や祖母樣に縋りたいといふ氣持にて、稍聲を鼻に入れて泣くものにて、これは日頃可愛がり過ぎたる結果にござ候間、急には直りにくゝ候が、まづ頼んだ時に起してやらぬことゝ、他出の時に手を引かぬ事の二つを實行して見る方よろしく候。次は臆病泣きに候が、これは打つて少し痛いとか、擦つて血が見えるとか、或は知らぬ人を見ると、直ぐに泣き出すものに候。素よりこれには、いろ〳〵の原因はこれあり候が、何でも小兒の自信を強めることに工夫致す方よろしく「それは痛いでせうが、きついから泣いてはいけません。」といつた樣に、一方に同情を寄せ、一方に勇氣を奬めることが最も肝腎にござ候。癇癪泣きは、氣に入らぬ時に、場所も構はず、大の字形に寢て、疊を兩手でバタ〳〵と叩き、ワン〳〵と泣くものに候が、これは小兒が仇聲の爲めに特更に泣くものに候、氣儘我儘に育て候時は、かゝる癖もつき易く、威し泣きとは餘り違ひ申さぬゆゑ、その矯正法を用ゆれば宜しく候。すね泣きも癇癪泣きと然程かはりたることは是れなく候ゆゑ、よく〳〵注意の上、機を計つて嚴格に訓誡を加へる方宜しく候。以上の話は私がお前樣を初め健一亮二、その他姉の小供殘らずを手にかけて育て候經驗に御座候間、前樣に於いては、此の文御熟讀の上、早速御實行なされ度く候。なほ委しきことは、來春上京の節申し述ぶ可く候、まづは右要用まで、かしこ

十二月二十一日　母より

愛子どの　まゐる。

第十四作歌募集
題　挿花（イケバナ）
選者　大口鯛二氏
規定　一人一首繪葉書に認める事
優等の作歌は一月二十日發行本紙上にて披露すべし

第卅六回短文募集
題　隨意
選者　編輯局同人
規定　百八十字限カナ附用紙葉書
優等の作は一月二十日發行の本紙上にて披露すべし

第廿三回俳句募集
題　梅
選者　編輯局同人
規定　一人一句繪葉書に認める事
優等の句は一月二十日發行の本紙上にて披露すべし

第十六回新詩募集
題　隨意
選者　編輯局同人
規定　成るべく短きもの用紙葉書
優等の作は一月二十日發行の本紙上にて披露すべし

締切一月五日限り

子守唄

○　長野　小池滿佐子

坊やは善い子だ、可愛い子、晝は私に、おんぼしてー、よーるはかーさんに、抱ッこして、ほーんに、可愛いぼーさんよー、今に足が、出來たなら、廣いお庭で靴穿いて、あゝかいぼーしに劍提げて、戰ごとして遊びませうー、すーこし大きくなつたらば、あゝめが降らうが、風吹こが、かーばん提げて學校へ、いッて勉強をいたしませ、聽て大人に、なつたらば、お國を護る軍人に、なッて勳功を、世に立てゝ、胸に勳章輝やかせ。

○　和歌山　西ぬい子

ねんねーころいち、今日は二十五日よ、明日は此子の宮參りよー、宮へ參りて、何んと云ふて拜む、一生この子の、健康の樣によー。

子守歌を募集す
長短を問はず各地の子守歌御投稿被下度候

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

霜柱

松原至文

○停車場にて君一言一語、われも唯々、君も唯々、君が姿は時ならぬ霞と遠く、眼にうつるは品川の白き波頭、やがて窓の外は左も右も寒田暮山、とかくは結ぼれがたき車窓の夢に、明日は閭門に待たせ給ふ父母の俤を描きつゝ、今朝振り仰ぐ故郷の山、思ひ出多きわが姉の家につき申候。まぜ口を利く姪、這ひありく甥、乳呑兒の姪など、此の小さき叔父様を控へて、眠たき目こすりつゝ夜半過るまで京の話を開き居るに候。（田舍より）

○姉様のお家よりお出し遊ばされしお葉書、唯今拜見して微笑思はず顔にのぼり候。まだ知らぬ甥君姪君などの君を取巻き給ふお姿、別ては君が大きなる手擴げて、彼方を抱き此方を擁きて、笑み湛れ給ふ俤の、まざ／＼と目に見る心地致し候。都は寒き雲のゆきかひ、木枯のあとは雪ともならむ夜頃に候よ。わが國につく頃は咲かむとの給ひし水仙は今朝より冷たき色の花、唇を解き候。（都より）

○吾車の門に着く一足先、妹も國の女學校より歸省りたる所にて、門には出迎ひの乳母が笑顔、奥に通れば見ちがへる程大きくなりし妹の旅姿、父と母と三人して山の如く火を盛し火鉢圍みて圍話し居るに候ひき。さきくば夕暮を雲の旗手に物思はずとも過ぎなむ、病まずば國訛の乙女が小唄に泣かずとも足りなむ、さはれ見を思ふ親心、今日染々と身に泌みて、うとましかりし幾月幾日の旅窓の非を悟り、悔ゆること頻りに候。（田舍より）

○君には父母への孝行、家の事務、さぞかし朝夕をお忙はしくお暮し遊ばす師走のこのごろを、かるた會の準備にのみ、机の傍には居つかぬわが淺ましさを愧づるに候。今朝ほどクリスマスのお祝ひとして、君には『日記』一冊、妹の君には『かるた』一箱お贈り申あげ候間、お納め願上候。木曾路の西は白玉の冠いかめしき山々のたゝずまひ、朝日には天地の紫微宮となり、夕陽には山巓ふくむでゞしき岩の、瑠璃色なせる輝き、その間に清く美しき空氣を吸ひたまへる、君がお身の上の羨ましくも候かな。（都より）

○下男は炭燒にとて今朝山に上り候、今夕は鮮かなる空の色、八風が峰の彼方は琵琶の湖、その水の色の、夕日に映えて空の色に翳すに候にか、福王山の頂は杉の大深林、夫に續く八風の斑白の雪、その間よりほのかに／＼、白きもの、立登るは炭燒く煙に候か。北は尾濃十里の平原、彼の森、此の村、夜は遠く木枯の走り行く光景を想ひうかべ候。（田舍より）

短文

▲除夜の風（一等）　埼玉　森田竹子

世間の人皆がそは／＼してゐる都の大晦日は仲間に讓つて、私は遙々離れた田舍へ來た、夫は廣い田や畑を存分に吹かうと思つたからである、大きい林を私ががうと一吹すると、辛枝にしがみついてた枯葉が散々落ちる面白さ、實に愉快だ、一日吹き暮して或家の壁の破目を吹き込むと、エ、冷い風奴！雪でも持つて來やがつたかと、草鞋作つてた爺様が拳固で水ッ洟を拭つて、ハ、ハックシヨ。

▲選者曰　丙午畑文壇掉尾の傑作

▲鐘聲（二等）　佐賀　杠美舞子

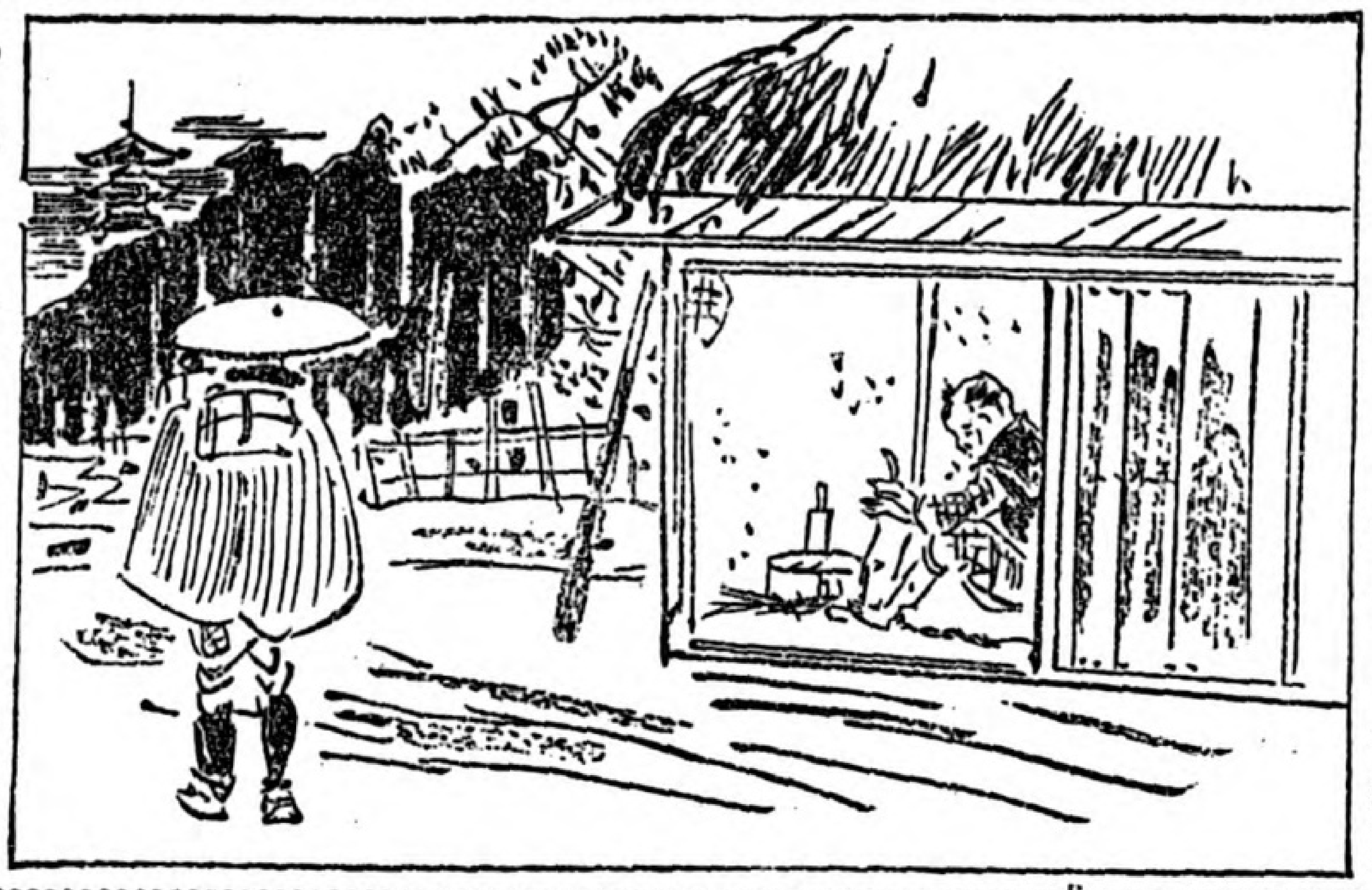
彼方の木立を拔いて朱の甍一團、立ち昇ると見る五重の塔、如何なる匠工の鑿にや成りし、日脚高くば精舍の門を叩いて、夫れも聞かうし七堂伽藍、安置し奉る諸々の佛體をも拜さましものをと、心殘して踵を返す時、晩鐘の音その木立より出て、谿を辷り峰に響いて、殷々として鳴り渡るに、二び、三び顧れば、美しかりし塔は其の鐘の一杵毎に、次第々々にうすれ行きて、果は殘る鐘の餘音の、靄垢の微をも滌め盡さんとやうに。

▲選者曰　詩趣掬すべし

▲夕暮（三等）　東京　中隈富士子

點々緑も交る、緋と黄のだんだら幕を引はつたやうな雑木の森の彼方、金色の群峯むら／＼と私が見る心のまゝに千變萬化、愛らしき少女の姿ともなり、或は猛獸の狩ふかと見れば、惡魔の嘲り笑ふがごと、やがて灰色となつて掻き消すやうに沈み行く夕暮を、默して古驛過ぎ行く旅人の、姿はあはれ大古の民のやう。

▲選者曰　壯又鬱



▲寒月（三等）　群馬　伏島たき子

月は、老松の枝を離れて、植込みの檜葉の葉越に、白き茶山花を照して居る、折から隣の家で擣打つ音が地に響いて、冬の夜の寒さ靜けさをそへるやうだ、イデ、此の月の傾くまでに、縫ひさしの衣を仕上げやうと、綿をも入れて、又外を眺めると、もう、庭は凍つて、月は海棠や、梅や、楓やの梢を過ぎ、西の櫻ぐねに入りかての、寒い光を全身に浴せかけて、鈍いわが手を笑ふやう。

▲選者曰　怕いお月様だこと

▲憂き夕　青森　吉田やす子

まだきの空怪しく鐘ると見るまに霽いみじうふりしきて、冬木ときわ木のわいだめなく枝もたわみ、背戸にしとろぎし笹川も夕べよりいと細ふなりぬ、日ころやつれし妹の心もとなくて枕べにはべりしに、折りから告ぐる入相ゝ鐘、いたづきの枕欹たてゝ「今日もはや暮れぬ」と幽かに嘆きしぞ憂し。

▲冬がれ　長野　高橋きよ子

物干の手すりによりて打仰げば、心地よき青空鸚の切れだになき南の山の端に棚引くは、おゝそれよ、淺間の噴烟、北に眞白なるは信越國境なる黒姫妙高の山々、東なるは上州、草津はかのあたりなるらん、此方の麓は遊安代の温泉、暑き頃共に遊びし君、今はいかにこの冬枯の影色見給ふらんと、西の方眺めやれば、睦しげに打群て飛び行く烏幾羽。

▲名無草　大阪　富永才子

色も香もなき名無草、あまりの見苦しさに里の乙女だにかへり見ぬを、いかにして都人のみ目にふれつらんと、今更にやさしうてなん、もとより秋すぎては何の眺めもなき冬枯の宿、日毎に淋さのみたちまさりゆくに引かへ、君がみたちはいつもかぐはしき言の葉の花咲かせ給ふぞうらやまし。（岡田春子の君に參らす）

なつかしき君がみふみを見るたびに　いとゞ都のまたはしきかな

▲猫　愛知　石川類子

祖母様／＼と呼立る孫い聲に、見れば子猫をだき、嬢が拾ふたよとさも嬉しげに見せける、頬の飾り嶋よかに愛ら敷、聲も細々と鳴きつ、野ら猫の子、こはよき物拾給ひしよと、家に飼ひ愛しければ、いつか馴れていつかの間も傍ら去らず、鞠にそばへ、はた手遊びすればおとな敷舐め杯、盜み心のあなれば惡さけなる猫の子も、今は邪無き心顯はれて可愛く、好き心に成しなと思へば、げに氏より育ちなりけりと嬉しさ限りに社。

▲今夜ばかり　東京　齋藤さと子

夕日は今四海に眞紅を解いた如く輝いて居るが、沈まんとして刻々其分を沒し其圓を沒する每に、金銀線の矢を放ち、一片の浮雲が梢、林に棲れると、北の方より小鳥の群が大空を渡つて行く、無雜、またうら若き十八の春、菊枝は去年より床に就いての苦悶、病もあらうに結核性の肺、今夜ばかりの命ぞと。

▲除夜の感　東京　水谷みつ子

新年がもう明日と云ふ晦日の晩に、早く／＼と時計の針ばかり眺めながら、今年と來年の間の瞬間は、丁度長い／＼トンネルの、最暗の中を汽車であきる程乘つて、ボッカリと明るい處へ出ておゝうれしいと思ふ様だといつも考へて居た、幼い時の事を思ひ出して一人でほゝえむで居ると、除夜の鐘がボーン、汽車は今トンネルを出た。

▲曉色　福岡　福田綾子

曉の夢より覺めて見れば、日光は雨戸の隙間を障子越しに明るく、何時に變らず溝鷦鷯がちゝちと裏の垣根で可愛らしく啼ひてゐる、床を出れば空朗かに庭先の山茶花が夜來の霧雨を帶びていと麗しう、滴る水晶の様な露の玉が朝日に輝いて芝の上に滾る、床しさ、何んと云ふ氣持の宜い朝だらう。

▲冬野　長崎　葛原玉園

夕日四の端山に傾けば、餘念なかりし女にも厭きて庭下駄のまゝ柴折戸引あけ外面に出て見れば、つい昨日迄は黄金の波豐に風にそよぎし稻もいつしか刈取られ、見渡す限り野も山も皆初冬の色見えて、やがては凄まじき嵐來ぬると知らせ顔なり、扨も過ぎにし頃迄は、桔梗刈萱女郎花などとり／＼に美はしく咲き亂れしも、今は跡なく枯果て、哀れにさびしき冬野の狀となりたり。

▲霜の朝　静岡　大川うめ子

小鳥の呼ぶ聲におどろきて雨戸くり開くれば、朝日をうけて家々の屋根の霜は、丁度金砂子を蒔いた樣に美しい、夕日を浴びてかゞやいた庭の楓も漆も昨夜の風に吹きはらはれて了つたのに引かへて鉢植の實生の紅葉ばかりが手柄顔にかゞやいて居る、間近の檜の梢で百舌鳥が高い聲で軋々と啼いたのにおどろいて振り向けば、白い胡蝶が風に追はれて力なげに枯菊の葉蔭に姿を隱した。

▲歳暮述懐　大阪　十合貴美子

光陰流水の如しとなむむべなる哉、ことしもはや日かずまさずなりければ、子供多く持てる身は何くれとなく新しき年をむかへる用意に忙しく、ひごろの怠とみにあらはれては、ます／＼かひなき身をかこちつ、常にはともしてかくもしてとあらかじめたのみ置きつる事の中もなし得ず、月日はいたづらに過ぎ行きて、空しく年のくるゝをいと／＼惜しまれてなむ。

▲お扇子　福岡　松村壽賀子

幼子に袂引かれつゝ、村はづれなる鎭守の社に至り、鳥居潜りて、高き石段登り見れば、ときめきし紅葉も今は大方散り果てゝうづ高く積れる中に、銀杏の葉數多あり　幼子見るより拾ひ上げて「おかーさんお扇子が」と、嬉しげなる笑みは面に溢れぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

◎明治三十九年中「愛國婦人」目次

▲社說

▲新年の辭(九五)▲實力の世の中▲日本婦人の責任▲境遇と緣分▲丙午の年(九六)▲聖なる事業▲凱旋の光景▲遺族の慰み(九七)▲大工のおはさん▲帝國の國民▲凱旋と婦人▲家庭と冬(九八)▲奢侈▲惡運の人に強かし▲是又儉約▲本會の光榮(九九)▲第一百號(一〇〇)▲普通の男氣▲春と學校(一〇一)▲否といふ語▲婦人の衣服(一〇二)▲凱旋大觀兵式▲戰利品の陳列(一〇三)▲愛國婦人會總會(一〇四)▲愛國婦人會の光榮▲戰後と節儉▲快活▲總裁殿下の御出張(一〇五)▲本會の擴張▲赤十字社總會(一〇六)▲身體と衣服▲銷夏の方法▲旅行の一新元▲婦人の手腕▲七十三歲▲女子の閑暇(一〇七)▲精神と衣服▲冷熱▲過暑(一〇八)▲無限(一一〇)▲同情▲奮發▲廢兵院▲軍人遺族子女慰安旅行▲女學生(一一一)▲同情(一一二)▲居候(一一三)▲苦勞さす可し(一一四)▲天長節▲善の鼻杯▲運動(一一五)▲小事を忽にするなかれ▲母の內證▲婦人界の活動▲支那人の規模(一一六)▲歲暮歲末の辭(一一七)

▲名家の說

題目　芳名　號數
▲模範の家　三輪田眞佐子　九五
▲大問題に着眼せよ　鳩山春子　九五
▲馬と豚の走りつこ　江見水蔭　九五
▲婦人と馬　四川勝藏　九五
▲一年の計は元旦にあり　山脇房子　九五
▲婦人の交際に就て　高木金子　九五
▲富國強兵と婦人　佐藤正　九六
▲家庭—學校—社會　廣岡淺子　九六
▲枯れたる頭に新しき福音　尾崎行雄　九七
▲活動の消息　矢島楫子　九七
▲家庭の秩序　齊藤孝子　九八
▲退縮の女子教育　稻垣滿次郎　九八
▲蒙古の女子教育　河原操子　九八
▲獨逸國の婦人　小河滋次郎　九九
▲交際と談話術　濱尾作子　九九
▲繪畫の趣味　跡見花蹊　九九
▲體育と大和魂　井上あくり　九九
▲婦人の位置と實業家の位置　男爵　澁澤榮一　一〇〇
▲母より受けたる教訓　三輪田眞佐子　鳩山春子　下田歌子　有島幸子　跡見花蹊子　仁尾繁子　棚橋絢子　佐方鎭子　一〇〇
▲婦人の本領　文學博士　桑木嚴翼　一〇一
▲一夫多妻としての四海國民　寺木綱雅　一〇一
▲共同的娛樂　農學博士　横井時敬　一〇一
▲社會改良主義　文學博士　桑田熊藏　一〇二
▲英國土產　同　高楠文次郎　一〇二
▲笑ひ方　下田次郎　一〇二
▲眞正の女子教育　廣岡淺子　一〇三
▲婦人の力に就て　宮川鐵次郎　一〇三
▲歐米の婦人　麻生正藏　一〇四
▲中流以下の家庭　原敬　一〇四
▲盛衰の秘訣　松岡康毅　一〇四
▲米國婦人の經濟思想　小崎千代　一〇五
▲家庭音樂に就て　永井建子　一〇五
▲現代日本婦人論　伯爵　柳澤保惠　一〇六
▲予の女子教育觀　男爵　松平正直　一〇六
▲上代の日本婦人　文學博士　芳賀矢一　一〇七
▲美術趣味の發展　正木直彥　一〇七
▲小兒の保護と教養事業　下田次郎　一〇七
▲自營心の養成　佐藤正　一〇八
▲婦人と社會事業　法學博士　小河滋次郎　一〇八
▲將來の日本婦人　鎌田榮吉　一〇八
▲歐米の養護事務　石井亮一　一〇八
▲歐米婦人と日本婦人　醫學博士　高木兼寛　一〇九
▲英國人の氣風　文學博士　內田銀藏　一〇九
▲獨逸の婦人　藤谷孝雄　一〇九
▲女子職業問題　手島精一　一〇九
▲結婚と寡婦　河原操子　一一〇
▲商業と其修養　藤井綱子　一一〇
▲婦人と文學思想　登張信一郎　一一一
▲交際術の養成　中島德藏　一一一
▲秩序と禮儀　井上友一　一一一
▲人生の悲樂　文學博士　前田慧雲　一一二
▲獨逸の家庭　永井潜　一一三
▲國際趣味の養成　伯爵　酒井忠興　一一四
▲現代婦人の缺點　吉田靜致　一一五
▲姑者の武意論　男爵　後藤新平　一一六
▲家族制と個人制　海老名彈正　一一六
▲日本婦人の位置　文部次官　澤柳政太郎　一一七
▲田園生活の趣味　農學博士　横井時敬　一一七
▲同居制と別居制の利害　本多貞子　一一七
▲現時の女子教育　大島義脩　一一八
▲瑞西の赤十字會　法學博士　秋山雅之助　一一八

▲家政

▲小兒の家庭教育　ドクトル　川瀬元九郎　九五
▲髮自慢　糸左近　九五
▲玩具と其製造方　笠原吉太郎　九五
▲お正月の美衣　久津見蕨村　九五
▲是は何に　同　九六
▲故郷なる姉よりの手紙　糸左近　九六
▲火の用心二十八ヶ條　九六
▲日本民族に適合せる新家庭を作れ　三輪田眞佐子　九七
▲虛榮心を去れ　右島幸子　九七
▲「あんよ」に御菓子　久津見蕨村　九七
▲秘密の交換　糸左近　九八
▲育兒十個條　ミセスクリイン　九八
▲芝居と赤ん坊　久津見蕨村　九八
▲三ツの用意　小浦豁子　九九
▲我家の家法　子爵母堂　山地龢子　九九
▲役に立つ婦人　渡邊濱子　一〇〇
▲自分の鏡より他人の鏡　仁尾繁子　一〇〇
▲如何にして下女を使用すべきか　松崎悅子　一〇〇
▲心の衛生　久津見息忠　一〇〇
▲小さい事　下瀬勝千代　一〇〇
▲王者の名譽と婦人の本分　文學博士　建部遯吾　一〇一
▲中庸を失ふ勿れ　南部柳子　一〇一
▲春先の小兒衛生　川瀬元九郎　一〇一
▲齋藤時代の御家風　新山雅枝子　一〇一
▲犬と家庭　入江鐘吉　一〇三
▲嚴格なる我家庭　呉文聰　一〇二
▲婦人の職業と能力　後閑菊野　一〇三
▲窮究たる淑女　糸左近　一〇三
▲日米家庭の比較　安部磯雄　一〇四
▲梅雨生活　糸左近　一〇四
▲梅雨の小兒衛生　ドクトル　川瀬元九郎　一〇四
▲詩人の細君　古屋ます　一〇五
▲夜涼のはなし　糸左近　一〇五
▲小供の鍛錬　ドクトル　川瀬元九郎　一〇六
▲御臺所　糸左近　一〇六
▲結婚後の五十年　岩佐認子　一〇七
▲夏化粧　糸左近　一〇七
▲氷と汗　ドクトル　川瀬元九郎　一〇七
▲海水浴に就て　糸左近　一〇八
▲長命の秘密　糸左近　一〇九
▲秋の小兒　ドクトル　川瀬元九郎　一一二
▲母の乳　ドクトル　長井岩雄　一一三
▲金錢の使用法　コーツ夫人　一一六
▲主婦の資格　男爵　松平正直　一一七・一一八

▲小說

▲新年の河　武田鶯塘　九六
▲廢兵の妻　武田櫻桃　九七
▲二の人形　三島霜川　九八
▲同情袋　武田櫻桃　九九
▲坊やの古足袋　三島霜川　九九
▲樂人　三島霜川　一〇〇
▲姉の御墓　三島霜川　一〇一
▲花嫁後　江戸靜川　一〇二
▲銀杏若葉　三島霜川　一〇二
▲隣の家　生田葵山　一〇三
▲初夏の光　三島霜川　一〇四
▲彼のせくへ　德田秋聲　一〇五
▲想思曲　江戸靜川　一〇六
▲巢立　三島霜川　一〇七
▲歸省　武田櫻桃　一〇八
▲新婚旅行　生田葵山　一〇九
▲映　森田竹子　一一〇
▲紅芙蓉　加藤いそ　一一一
▲結婚後　花輪よしの　一一二
▲木槿垣　武田櫻桃　一一三
▲若き母　生田葵山　一一四
▲黃菊白菊　江戸靜川　一一五
▲落葉　一瀬はつ子　一一六
▲きらゝき　四村醉夢　一一七
▲春風　小川未明　一一八

▲史傳

▲馬內侍　三浦千畝　九五
▲毛利元就夫人　下田歌子　六五
▲女流奇譚　三浦千畝　九六
▲今式部　同人　九九
▲賢貞婦人傳　同人　一〇〇
▲ライオン女史　龜山郭公　一〇六
▲スチタン夫人　杉浦政泰　一〇八
▲丁然尼　須藤求馬　一〇九
▲ゲーテの姿　平弘毅　一一〇
▲高島竹雨女史　須藤求馬　一一一
▲ゲーテの母　原弘毅　一一二
▲小野寺母子　須藤求馬　一一三
▲ブラウニング夫人　人見東明　一一四
▲ワイコー王妃　原篠川　一一五
▲土肥實平の妻　須藤求馬　一一八

▲愛國文壇

▲美哉日本　江戸靜川　一〇〇
▲年頭　公爵夫人　近衛貞子　一〇八
▲初秋　松原至文　一一一
▲秋のにほひ　人見東明　一一二
▲暮ずれの音　松原至文　一一三
▲山嶋　佐々木信綱　一一三
▲初秋の旅　伯爵夫人　酒井夏子　一一三
▲秋の千草　跡見花蹊　一一三
▲秋の寄手　松原至文　一一四
▲日記の一ふし　伯爵夫人　酒井夏子　一一五
▲暮秋日記　松原至文　一一六
▲歌合せ　松原至文　一一七
▲霜柱　松原至文　一一八

▲子供倶樂部

▲桃太郎物語　入江鶴吉　九五
▲島のはなし　三島霜川　九五
▲坊やの古足袋　トルストイ　九九
▲小鷺の發句　高階柳陰　一〇一
▲小さい竹細工人　江戸靜川　一〇三
▲御池の園遊會　三島霜川　一〇五
▲蟻の軍勢　黑川幹太郎　一〇五
▲鶴と熊と獅子と象　江戸靜川　一〇六
▲鼠の眼鏡　黑川幹太郎　一〇七
▲袋鼠や大鹿や　三島霜川　一〇七
▲櫻、獅子　江戸靜川　一〇八
▲雀合戰　三島霜川　一〇九
▲鳩の花束　入江潮吉　一一〇
▲花屋敷の大立物　三島霜川　一一〇
▲烏勘左衛門　江戸靜川　一一一
▲虎子さん　三島霜川　一一二
▲菊日和　江戸靜川　一一三
▲蝶の御茶　笠間醉雨　一一四
▲眼白物語　三島霜川　一一五
▲秋の蝶　江戸靜川　一一六
▲燕塚　一一七
▲小兒の信念　巖谷小波　一一八

▲短文

▲平和(浦月子)　外四編　九五
▲朝(小野英子)　外四編　九六
▲最も愛讀せる書(浦月子)　外一編　九七
▲旅行(浦月子)　外五編　九八
▲春雨(森田竹子)　外七編　九九
▲日(六郷公子)　外四編　一〇〇
▲夢(森田竹子)　外四編　一〇一
▲春の夜(森田竹子)　外十編　一〇二
▲神の息吹(谷川小夜子)　外十編　一〇四
▲古郷の山水(岡部さゑ子)　外五編　一〇五
▲茶摘み(森田竹子)　外十一編　一〇六
▲夏の夕(水野淑子)　外六編　一〇七
▲十分間(花輪余志野)　外　一〇八
▲暁色(花輪余志野)　外　一〇九
▲夏の教育(中興けい子)　外三編　一一〇
▲亡父(富永才子)　外八編　一一一
▲神秘(横田芳子)　外八編　一一二
▲秋の夕(恩田春子)　外七編　一一三
▲雅の友(富永才子)　外八編　一一四
▲白菊(富永才子)　外十二編　一一五
▲錦の袖(森田安子)　外十三編　一一六
▲入讚學(富永才子)　外十編　一一七

▲和歌

▲戰後新年(近衛貞子)　外六首　九五
▲戰後新年(岩倉久子)　外四十首　九六
▲初日影(四久子)　外　九五
▲春風(平松いと子)　外　九六
▲親鵆(四久子)　外　九七
▲春の海(浦月子)　外　九八
▲櫻花(四久子)　外　九九
▲花間春月(浦月子)　外　一〇〇
▲汐干狩(小島靜子)　外　一〇一
▲蟹(渡邊敬子)　一〇二
▲愛國婦人會總會(渡邊敬子)　一〇四
▲あはがき(武田すま子)　外　一〇五
▲ほたる(中村益子)　外　一〇六
▲夏月(富永才子)　外　一〇七
▲納涼(阿部さゑ子)　外　一〇八
▲詠史(芦澤せき子)　外　一一〇
▲瀑布(中村益子)　外　一一一
▲月夜訪友(伏島たき子)　外　一一二
▲秋冷(岡田春子)　外　一一三
▲雁(川村吉子)　外　一一四
▲菊(今井紀子)　外　一一五
▲紅葉(諸戸常子)　外　一一六
▲冬夜(花輪よしの子)　外　一一七
▲除夜(水野淑子)　外　一一八

▲俳句

▲土筆(近藤靜子)　外　九八
▲桃花(和田きさと子)　外　九九
▲蝶(和田きさと子)　外　一〇〇
▲時鳥(市橋成子)　外　一〇一
▲青葉(白井政子)　外　一〇二
▲清水(白井政子)　外　一〇四
▲藤花(川村融子)　外　一〇五
▲氷(白井政子)　外　一〇六
▲七夕(山內せい子)　外　一〇七
▲要紹(市橋成子)　外　一〇八
▲朝顏(田島正子)　外　一〇九
▲虫(田島正子)　外　一一〇
▲立秋(荘司種子)　外　一一一
▲蓮花(赤澤英子)　外　一一二
▲月(古川よれ子)　外　一一三
▲きぬた(澤田道子)　外　一一四
▲菊(內藤まき子)　外　一一五
▲落葉(森田竹子)　外　一一六
▲初霜(木幕千代子)　外　一一七
▲大晦(森田竹子)　外　一一八

▲新體詩

▲霜の滴　岩野泡鳴　一〇二
▲君がみ　岩野泡鳴　一〇五
▲孤寂　岩野泡鳴　一〇八
▲臨接間　岩野泡鳴　一一四
▲枯れ窓　岩野泡鳴　一一六
▲御代の光(近藤靜子)　外　九五
▲愛國婦人會の歌　浦月子　一〇一
▲小田の畔(森田竹子)　外　一〇四
▲花橘(森田竹子)　外　一〇五
▲二つの影(森田竹子)　外　一〇六
▲小掖聲(寺松政子)　外　一〇七
▲さゝやき(森田竹子)　外　一〇八
▲眞如の月(伏島あき子)　外　一〇九
▲月の駒(森田竹子)　外　一一〇
▲立秋(吉岡まさえ)　外　一一一
▲さびしら(都築入重子)　外　一一二
▲袖垣(小野淑子)　外　一一四
▲菊花(森田竹子)　澗　一一五
▲秋泊(茂呂その子)　外　一一六
▲天津(勝山千代子)　外　一一七
▲冬江漁夫(茂呂その子)　外　一一八

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

天　埼玉　水野淑子

枕へに寐着ならへていねし子の夢路にはやも年はきにけん

▲評曰　人生此の樂しき夢を結ぶこと幾回ぞ。
附言　新年を春といふ事むのれは好まれど春着春網などは普通の如くなれば題ずべきにもあらざらん尚結句は「年はきぬらん」の方なるべし

地　福井　渡邊淸子

來んとしをまつの飾りは立てながら猶惜しまれぬ今宵ひとよは

▲評曰　惜むなかに待つ心あり待つなかに惜む心あるが除夜の人情なるべし

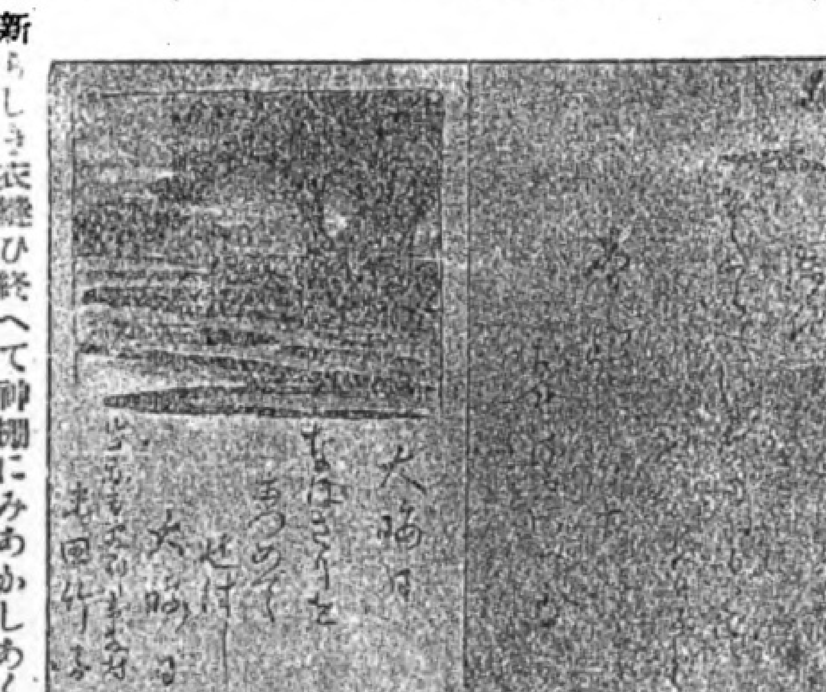
人　群馬　木暮千代子

なに貝もひとつひろはす年波は机のしまをこよひこゆらむ

▲評曰　初句「なにのかひ」とせん方まさるべし

甲

一年のかぎりぞと撞く百八の鐘に悔なき人はあらしな　青森　茂呂その子
▲評曰　結句「人や幾人」とありたし
たかやともおきあかすなる埋火のしらまぬほとや今年なるらむ　函館　坂田園子
除夜の月はやふけぬれと隣には餅つく音のなほ聞えつゝ　大阪　富永才子
こぞよりはひとりまとゐの數ふえていとにきはしはく送る年哉　愛知　湯淺とよ子
くさ〲の勸めも終へて新らしき年まち波る宵の樂しさ　岩手　山崎米子
何一つなしをへぬまに一年はこよひはかりとなりにける哉　京都　難波長久子
移り行く年も忘れてこよひさへ夜すがら子らとかたりあひつゝ　福岡　松野操子



新らしき衣縫ひ終へて神棚にみあかしあぐるこゝろすゞしさ　秋田　芳賀ます子
ひとゝなくてすきし今年もなか〱にこよひ惜まるゝかな　青森　笹田正野子
▲評曰　三句を改めばよき歌となるべし
推敲したまへ
いたつらにことしも夢とくれ竹の一よと鐸りてさむるかなしも　愛知　市橋幾子
なりに明けあらしに暮れて山里もとしは一夜　岡山　武田須磨子
いそかしくゆきかふ人のおとたえて年　鳥取　近藤靜子
にはそれもるゝ殘りけり　岡山　辻まさ子
今宵わたりかよはひ一夜となりにけりはかなく

年のうちのことはなしをへあたらしき年をのみまつ今宵たのしも　埼玉　加藤みよ子
こと多き此世の中をいたつらにことしもけふになしてける哉　長崎　大塚入重子
數ならぬ身にも重なるとしの數思へは寒き除夜の鐘かな　東京　秋元小萠
明けはとく晴着をきんと喜ひてねたる其子の夢や如何なる　島野　槇原千代子
いとせめてをしまるゝかなあら玉の年もこよひなかきりと思へは　東京　川村孝子
粧ひし男のゆづる葉なれし矢よりとく今年もけふと暮れはてにけり　山口　國佐春子
あたらしき年をむかへんあすの日とうれしくもまつ一夜なる哉　東京　五十嵐淸子
小車のめくる月日の早き哉きた一歳の暮となりにき　京都　山本納子
惜めともこよひ一夜となりにけりなにゝはかなく月日へにけん　京都　古川よれ子
あけゆかはのとけき年をむかへんと思へと惜しき今宵なりけり　青森　田島正子
ことしはと思ひ定めし事わさの半ならぬをなけく夜半哉　山口　水田貞節子
あらたまる年をまつ身もこよひ一夜かきりとなれはをしまるゝ哉　大阪　十合貫美子
ひとゝせをあたに過していまさらに惜むはなにのこゝろなるらん　靜岡　淸水はつ子
このとしもことなく暮れてゝ年を送り迎ふる夜となりにけり　福岡　松村壽賀子
こん年をまちはすれとも過きにける月日もをしき今宵なる哉　京都　金澤收子
かしましき浮世を外の山里も數にはもれぬ除夜の鐘哉　東京　中山正子
いたつらに惜しみあかさんそれよりも今年の夢をむすひ終へなむ　靜岡　大高ふみ子
いつの世か我こゝろさし叶ふへき今年もこゝに只過しけり　青森　留目文子
あれもせん是もなさんと思ふ間に今宵はかりとなれる年かな　青森　留目うた子
長かれと祈りし年も早やくれぬさてら今年は何かなしけん　靜岡　小宮とめ子
數ふれは野寺の鐘の音も早や年のかきりとなりにける哉　東京　麻生敏子
あら玉の年の晴衣もとゝのひぬしはしふみ見んともし火の下　群馬　伏島たき子
▲評曰　この寸閑いかばかりの愉快ならん
こん年をまつのかざりもたて果てゝ心靜かにかたる夜半哉　愛知　木原貞子
こむとしのいそきにむかふ燈火に今年の影も早やつきんとす　愛知　石川類子
一年のわさをしはてし今日の夜は出る初日をまちわたる哉　京都　渡邊とき子
のとかにも年をまつかななにくれとことなしをへし晦日の夜は　京都　渡邊錦子

乙

明日はよき年迎へんと思へともなほ惜まるゝ今宵なる哉　仙臺　渡邊道子
來ん年を待ちくたびれて寢たる兒の心うらやまし今宵一夜は　東京　森川榮子
ひとゝせを只いたつらにすこし來てのこる一夜をしむはかなさ　東京　岡田春子
いかなれは年のをはりを惜むらん初日まつまのうれしきものを　靜岡　靑木絹子
年明けは遊ひかはさんうれしさに今宵ひと夜をいかにくれむらん　靜岡　佐々木久子
あすよりは今年にましてはけまんとのそみ語らふ姉よ妹よ　東京　西川鏡子
けふことに老行身とは思へともとし明の待たれぬる哉　岡山　森島古野
としの中も今宵一夜となりはてていよゝ別れの惜しまるゝ哉　岩手　佐藤よれ子
ゆめの間に今年もけふとくれ竹の一夜をふして年をむかへん　靜岡　唐坂淸子

繪葉書贈呈

本誌が毎號募集せる和歌、俳句の繪葉書は、左の方法の下に是れを諸姉に贈呈す。

和歌
天位當選者に　二拾枚
地位當選者に　拾五枚
人位當選者に　拾枚

俳句
天位當選者に　拾五枚
地位當選者に　拾枚
人位當選者に　五枚

短文
一等當選者に　拾五枚
二等當選者に　拾枚
三等當選者に　五枚

新體詩
一等當選者に　拾五枚
二等當選者に　拾枚
三等當選者に　五枚

時はかろうつはのはりのすゝみさへとしの別にとゝめてしかな　福島　横川綾子
夢とのみ思ひし年ははや暮れて惜むかひなき今宵なりけり　宮城　阿部すゞ子
やすらかにこのひとゝせをくれ竹ののこる一夜をおくる樂しさ　三重　大厩よし子
こむ年のそなへも終へてかそいろと埋火に聞く除夜の鐘哉　長野　金野やほゑ
年なみの早き流れを今さらにせきとゝむへきしからみもかな　靑森　鈴木やす子
いたつらにすきし月日は呉竹の一夜のふしとなりにける哉　靑森　鈴木はぎ子
思ふ事年もならす年の內もこよひ一夜となりにける哉　埼玉　森田竹子
ゆくとしのなこりとゝめし關の戸にほそくも殘るともしひの影　函館　尾崎よれ子
除夜の鐘ききて驚く賤か女かあすの春衣やいかになすらん　埼玉　調布忍子
いたつらにはかなき夢のさめぬ淵に過きゆく年をかこちこそすれ　三重　莊司りつ子
いつの間に日數重ねて殘りなくあはれことしもくれはてぬらん　三重　中島千萬子

丙

夜をこめてをしむかひなき年浪のはてはわか身によするなりけり　山口　末田竹子
月花にうかれしとしのをはりそといねすこよひはをしみあかさむ　東京　吉田かめ子
門松にそへてたてつる七五三竹の一ふしのまに年やきぬらむ　秋田　細谷はる子
さま〱となすへきわさのつきぬ間に年も一夜の名殘とそなる　三重　莊司種子
▲評曰　名殘は餘波の意なるを最終の意に用ゐるもの近來多しされどなほこゝろよからず
何事も明日あるものと思ふまし夢のまに〱年そくれぬる　三重　南部操子
何事もなさて今年も暮れ果ぬ今更をしき年の暮かな　東京　土師利根子
よろつよの榮えも見えて樂しきはげにためしなき除夜のにきはひ　靜岡　森原さだ子
この年も今宵かきりとよもすから追ゆく人の絶えるまもなし　三重　小島駒子
人足のしけきか故に門守らて殘るひと夜を犬もいぬめり　三重　長井民子
はなもみちちりにし時は惜まれとをしきはくるゝ年の夜半哉　長崎　葛原梅香
なす事もなくてむなしくいまはたゝこよひ一夜となりにける哉　函館　安藤喜與子
百八の鐘もはつかになりにけりいまやことしのわかれなるらん　兵庫　中村益子
何事もなすとはなくてあはれまた一夜はかりに殘る年哉　京都　山本靜江
一年をなす事もなくすきし身は今宵一夜の惜しまるゝ　東京　安東信子
明日よりはのとけき年になるなれと今宵一夜を待ちあかすかな　長崎　葛原玉聞
明日よりは春となりなん今宵こそいまを限りの今年なりけり　京都　岩室駒子
呉竹の一夜はかりを限りにて年や惜しまん春やむかへん　岡山　四村長子
松立てゝ今日より門は春なれと明ゆくまてはことしなりけり　靜岡　里見ゆう子
うき世なれは身は水島の月に日にあしにひまなくくるゝ年なみ　福井　渡邊貞子
あら玉のことしは今日を限にてよるはあひきの聲もきこえつ　山形　阿部さゐ子
除夜の鐘響わたれは立さわく年の波路もしつまりにけり　新潟　靑木美家子
いつしかと月日は過きて夢の間に今年も今日となりにける哉　京都　淸水今子
年々にいや榮えます大御代の初あけほのにひゝく除夜哉　岡山　山崎露子
何事も春まつ支度とゝのひて只一つ待つ除夜の鐘哉　東京　上野芳子
今はしも活けをはりける南天に水仙かをる除夜の家哉　東京　山口理勢子
國のためこの世を去りしわかせこのふる事しのふ今宵一夜は　長崎　小野みな子
明ぬれはかはなき夢の心ちして今歲も今日とくれはてにけり　靑森　花山あい子
幼な子の日に增す愛にひかされてはや一とせのくれとなりけり　三重　南部種子
きのふかもこしと思ひし此年もはかなくすきしことのやさしき　新潟　阿部秀子
めてさしな明日祝ふて今日なるをゆく歲のをしくはあるらん　愛知　木俣六女子
いたつらになりゆくわれに關守のあらはと思ふ歲の關かな　新潟　岡田きくえ
月花に袖ぬらしつゝ過しけるとしたに今宵はなほをしきかな　東京　中隈富士子
明け暮に寄せ來る今日の年波をくゝりて春の花を待つらむ　三重　莊司小文
除夜の鐘夕への鐸と入あへて歌の林に白梅かをる　靑森　吉田やす子

さま〱の思ひこもりて暮てゆく年のなこりのかれそきこゆる　横濱　鈴木まつ子
怠らて過し暮こそきやすけれたゝいそかるゝ春の支度に　長崎　林田鹿子
呉竹の一夜はかりとなりぬれとまちかき春にのひんとそ思ふ　三重　西山數子
一とせも今宵にくるゝふる寺に殘るひとつや夕くれの鐘　福岡　鋒谷よれ子
幾千代もかはらぬ春をにきはしくよろこひてまつ除夜そたのしき　東京　楠田りん子
あらたまの歲むかふとていそかしくにきはしきかな年の暮方　東京　小島幹子
世の中はあふさきるさのいとゝしくいそきもあへすひゝく鐘の音　兵庫　多奈賀久惠子
人みなも心あせらんつこもりの年のきはみとおもふなりせは　東京　三宅久子
賤人のしけきか中のうき事は樂しき年の暮にてありける　東京　安東ちせ子
世はなへて波風もなしをしむへき年はこよひをかきりと思へと　岡山　貝原すゑ子
呉竹のこよひ一夜となるまゝにをしみてもなほつくや鐘の音　東京　渡邊仙子
一年を事なく過きて又今宵惜みもあへす年そまたるゝ　兵庫　下岡松枝
明日よりはまたこもらるゝ年なれとのこる今宵をいかに過さん　岡山　梶尾新子
惜しきかな殘るひと夜のきさむ音三千日七たいなからへし身も　三重　西山ひさゑ
▲評曰　三千日を七回經たるは六十年なり實際にさる老人の歌なりや
をしと思ふ心もしらて人みなをれよとの鐘の何ひゝくらん　仙臺　渡邊作子
▲評曰　除夜にもかぎらぬさま也
ふる雪を冬の名殘と眺めなむやかては春の來むと思へは　函館　佐多鈴子
▲評曰　冬盡きて春來るは陽曆二月の事也
まとゐしてかたりふかさんいとせめて年の名殘のこよひはかりは　長野　高橋きよ子
▲評曰「いとせめて」の用法たがへり
長き夜にれむりもやらぬ川かせのあけほのさむくあさ日まつらん　岐阜　志津たま子

新體詩

▲多江漁父（二等）　青森　茂呂その子

浮世をしのぶ蓑笠に
こゝろの節の釣竿や
垂れたる糸を卷納め
獲物の籠を覗き見つ
櫂の雫を振り拭ひ
小舟ゆら〱灘下る
晩のみづうみ雪霽て
斷れ〱の雲のあし
十日餘りの月影に
すなどり歌の聲寒し

▲寒夜　埼玉　森田竹子

星影冴えて夜は更けて
根山に歸る鳥もなし
里の彼方に二に三つ
燈火ゆらぎて風寒く
哀れに唄ふ子守子の
聲も凍りて聞ゆなり

天　山口　末田竹子
なほさりをあつめてせはし大晦日

地　熊本　黒川靜枝
座敷たけ春にしてあり大晦日

人　群馬　木暮千代子
大晦日物騷しう暮れにけり

十客

鼠夜中にはたきの音や大晦日　東京　木村駒子
風呂の火の絶へず烟るや大晦日　東京　大澤・幸子
する事も無くて忙しや大晦日　埼玉　森田竹子
挨拶もたすきの儘や大晦日　東京　彦坂たき子
風呂敷に恥は包めず大晦日　京都　山本しづ江
背の嬰兒の添乳や大晦日　栃木　荒川香美子
島々も燈は通ひけり大晦日　廣島　白井政子
船締りも仕度の有るや大晦日　東京　中山正子
門口て立挨拶や大三十日　東京　松苗露子
怠りし月日惜しむや大晦日　長野　金野やほゑ

〇

大晦日鳥屋の門をのそきけり　靑森　櫻井かれ子
行きかひの足音せはし大晦日　大阪　十合貫美子
蓑虫の浮世覗くや大三十日　東京　赤澤英子
松竹のそよきもせわし大晦日　東京　楠田りん子
出入幅くりかへしけり大晦日　群馬　伏島たき子
春と云ふ善き隣りあり大晦日　熊本　黒川友擧
大晦日室の梅見る四五度哉　秋田　芳賀ます子
歌借に隙算外なり大晦日　愛知　市橋幾子
神棚に切火の音や大晦日　三重　南部種子
寢て待たぬ果報や樂な大晦日　靑森　茂呂その子
大晦日急て扇子も踊りけり　靑森　田島正子
靑竹を引ずり行くや大晦日　熊本　齋藤さき子
明日待し子は寢入りけり大晦日　東京　加藤ふみ
裏表世はさま〱や大晦日　東京　齋藤さよ子
花嫁の困るもおかし大晦日　東京　中隈富士子
出つ入つ黄金の花や大晦日　三重　西山數子
裕なる家や宵寢の大晦日　三重　莊司種子
世の中の苦樂の關や大晦日　東京　加藤濟子
大晦日苦樂せはしき人心　埼玉　水野淑子
年寄も見も小走りや大晦日　京都　入田艶子
世の人の一時に驅くや大晦日　山形　河邊さゐ子
大三十日年越山の峠哉　長崎　小高さくす
大晦日用もなき戶を出入つ　岡山　山崎鏡子
大晦日れむりわすれし小供哉　東京　三宅久子
顏子もたすき掛なり大晦日　長崎　猪とき子
苦しさと樂しさとあり大晦日　靑森　笹田正野
夜を越せば花の世もあり大晦日　京都　乾田つるへ
明日ありと思ひ息はす大晦日　新潟　町田きくゑ
晴衣縫ふ處女こゝろや大晦日　[illegible]　山內せい子
樣々の思案浮へて大晦日　廣島　高橋澤子
世渡りの道の坂なり大晦日　神奈川　大谷こう子
夢一重明日の待たれて大晦日　京都　大高ふみ子
床の花明日は咲くらん大晦日　京都　渡邊米子
明ぬれば去年とや云はん大晦日　靜岡　里見優子
大晦日心斗りの蕎麥哉　京都　古川よれ子
樂しさや重荷下ろして大晦日　東京　山口理勢子
一歲は夢と過きけり大晦日　京都　金澤收子

▲注意
短文、和歌、俳句、新體詩募集課題は六ページにあり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

○都足袋ハ農商務省ニ出願シテ登録商標専用ヲ得タル物ナリ
○都足袋ハ外觀優雅ニシテ現ニ都人粋士ノ歡迎ヲ受ケツヽアリ
○都足袋ハ踵ニ縫目ナク衣服ノ裾ヲ傷フ丁ナシ

都足袋粋乃友

○都足袋ハ製作ニ至大ノ注意ヲ拂ヘリ故ニ具合適良ニシテ縫目ノ破綻スル虞ナシ
○都足袋ハ材料最モ優逸ニシテ經濟上尠ナカラザル效力ヲ有セリ

東京日本橋室町三丁目 龜屋足袋店
電話本局一二七一番 宮内清兵衛 (略電信ヌメカヤ)

京染 十一月十五日より年内粗景進呈
御半ゑり大賣出し
大見切半ゑり取揃申候
わんぷらいすしよっぷ
日本橋區通り三丁目
電本二千九百四十七番

優等清酒

歳暮御進物用
●鑵詰●洋菓子●洋酒●食器具

二合四合 一升 進物用 一打以上 箱入

發賣元 東京日橋區てりふり町通り
高橋商店
洋酒食料品問屋
電話浪花千五百六十一番

本品は今回宮内省御買上品たる光榮を辱せり

煉香油 パール
貴婦人用 紳士用

パールハ學術的最良ノ煉香油ニシテ四季ニ適シ毛髪ヒゲヲ保護養生シ兼テ悪臭ヲ去リ愛スベキ香氣ヲ有スル世界有数ノ逸品ナリ

發賣元 東京八丁町 尾分店

(ラクダ印)

(麝香石鹸)

ラクダ印麝香石鹸ハ高貴なるべき麝香に響す「スミレ」の香料を多量に含むが故に一度使用せバ其香氣身体ハ元より手拭、タオル、ハンカチーフ及び浴後のゆかたに至る迄うつり香いたし五日間ハ依然としてかほりを失なはざる勢力ハ舶來品にも未だ見ざる一大特點を有す

○(定價大形廿錢 小形拾錢) (熱心勉強なる和洋小間物賣藥化粧品店にて必ず販賣せり)

近來類似品有「ラクダ印」と井上に御注意

東京本石町三丁目十八番地 芳香類問屋 井上太兵衛

登録商標

ゴム裏雪踏

●發賣元 東京市神田區上白壁町九番地(電話本局弐千五百五十壹番) 今井商店
●販賣所は全國到る所の有名なる履物店にあり 近頃粗悪なる類似品あり商標に御注意を乞ふ

日本元祖西川洋琴

高尚なる音樂の嗜好は
家庭の和樂を作る基なり

宮内省御用東京音樂學校御用
横濱市日の出町二丁目(電話八四一番)

西川オルガン及ピヤノ製造所

東京販賣店 十字屋樂器店 東京市銀座三丁目
關西代理店 武内樂器店 大阪市東區順慶町四丁目

《西川洋琴の聲調は舶來品に劣らずと専門家の讃詞を得たり、定價表は御申込次第進呈す》

白ゆり白粉は東京市内に賣捌つゝある白粉舶來品共四十四種に付き内務省衛生試験所の試験に於て無鉛白粉として第一に表明せらる
白ゆり白粉は梨園の花たる芝翫、梅幸、高麗蔵、羽左衛門等の常に愛用せらるゝ最優等無毒の逸品なり

東京本所 井手製

東京産科婦人科楠田病院長 楠田謙藏先生閲幷序
産科婦人科専門醫院 渡邊光次先生著

第十八版 普通 姙娠論(にんしんろん) 附り 姙婦の攝生

本書は久しく産科婦人科に從事して經驗に富める専門醫渡邊先生の著にして生殖器の解剖、生理、衛生を始めとし生殖に影響する全身の疾病婚姻並婚姻後の注意姙娠幷姙娠後の攝生に至る迄廿三章百廿項を設け悉く網羅して平易簡明に説述し加之精巧なる石版圖畫數十葉を挿入し振假名を付せられたれば苟も自己の健康に注意し系統を蕃殖し強健の子孫を得んと欲する諸君は男女を問はず必ず一讀せざる可からざるの好著述なり一たび此書を繙かば多病なりし夫婦は壯健となり不和なりし閨門は圓熟し不姙なりし婦人は可憐の小兒を擧ぐるを得ん大方の諸君乞ふ世にありふれたる此種の著書と同一視することなく一讀其不幸を癒せらる可し

一名 兒を設くる法
石版密圖四十個挿入 正價六十錢 密封郵送十錢 紙數二百五十頁 洋裝中本
附錄 小兒養育法

(一)家庭衛生新書 醫師岡部著 四十五錢 郵税四錢
(一)普通臨床看病法 醫士 氏著 正價卅錢 郵税四錢
(一)最近肺結核療法 北里柴山著 價八十錢 郵税六錢
(一)姙娠婦の心得 一名安産法 育兒の法 價三十錢 郵税四錢
(一)最新産婆學 高等産科婦養成所 八十五錢 郵税十錢

發行所 神田鍛冶町 電本九四九 誠之堂書店

ムスク香水

(大瓶壹圓●中瓶六拾五錢●小瓶二十五錢)
○本品は芳香の永く保つ點に於て頗る高評なり

東京日本橋區本石町四丁目
ホーサン石鹸本舗
本舗 松澤常吉
(電話本局百四拾五番)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

セカイノシンブン

◎鐵道の半札　鐵道にては年齢によりて小供用の半札を賣る定めなるが此程スイツル國にて定めたる半札の賣方は出札口の側に身長を測る器械を具へ置きて、何人にても三尺一寸以上のものは一人前の賃を拂ふ事として年齢によらぬ事とせり

◎英國皇帝　エドワード七世にはマホメツト教の本尊たる土耳古王よりも多くの同教信者を治め玉ふ由、パレスチナ本國にある猶太人よりも多くの猶太人を治め且又アフリカ土着の小王を除く外他の國王の何れよりも多數の黒人を統治し居らるゝ由

◎純銀の艦體　獨逸國皇帝の銀婚式を祝せんとて同國の操艇、帆船倶樂部員等の皇帝に獻上せし贈物こそ他に比類なきものなれ、こは八個の純銀製船型にて帆走船の發達の順序を示せるものなる由にて此の内にはネルソン提督の乘船なりしヴイクトリー號の模型もありといふ此の立派なる艦體は机上ハ裝飾用なりといふ、

◎獸病院　の中最も完備せるものは印度國首府カルヤッタ市に近きロデプールといふ處にあるものなるべし、此病院にては約千頭の獸類治療を受けつゝありといふ、病獸は馬、牛、騾、象、犬又は羊等なり、病獸は英國獸醫學者の命令によりて八十人の土人の看護人に保護を受けつゝありといふ

◎英國の産穀高　は頗る少なるものにて一ケ年の産額一千三百萬石に過ぎずして、英國全體の人の食料としては十三週間を支ふに過ぎすといふ、

◎猫の鑑札　は此程獨逸國ベルリン府にて市會の定めたる處なり、此規則によれば猫は必ず首の周圍に金屬の輪を箝め置きて其上に番號を記し置く筈なりといふ

◎新聞博物館　といふもの獨逸國アヽヘン市にあり、其創立者はエオスカー、フオン、フオルケンベツリといふ人にて一萬七千種以上の新聞の綴込を藏し居るといふ

◎世界一の汽笛　は北米合衆國にあり、同國東セント、ルイ、電氣鐵道の爲めに作られたるものにて其高さ人の背丈程あり、此汽笛は一日四度發聲するものにて電氣時計と連續しありて其近傍四里内にある人々に時を報ずといふ、因に毎朝七時、正午、一時、及夕方六時に時を報ずるなりといひ、

◎噴泉時計　とにふはアメリカの森林中の小都會の住人間時間を報ずるものなり此の時計は時間を記したる文字板に槓杆と及針の外に何物もなし、此の槓杆は噴泉の水中に入れあり、此噴泉は三十八秒毎に水を噴き上ぐるものにて一秒の十分の一の相違もなき故水が噴き上ぐる時には必ず槓杆を押し上ぐる樣になり居りて針は三十八秒程進み行くなりといふ

◎世界最長の棧橋　は英國シエツペイ島にありて其長さ七千尺に及ぶといふ

新案よだれ掛　募集

〆切　一月廿日限り　二月五日發表

小供がよだれを流して其よだれが衣服にまでみし込みて困る事が多くあります依て本發行所は一般讀者より新案を募集します當撰者には相當の禮を差出します

愛國婦人發行所

新公論

東京最近の思潮を知らんと欲せば新公論を讀まざる可からず

世界最新の大勢を知らんと欲せば新公論を讀まざる可らず。

新公論は内外有力の雑誌數百種より毎號前一ケ月の有益なる材料を摘要掲載す是れ新公論が繁劇なる文明社會に特に重寶なる雑誌として有ゆる階級に歡迎を受くる所以

▲定價　毎月一回一日發行一冊十五錢郵税一錢半　一年分郵税共八十五錢一年郵税共一圓六十錢

發行所　東京市本郷東片町百十一番地　新公論社　振替貯金口座三三四〇番

佐々木信綱選　**玉川集**　定價三十五錢　郵税四錢

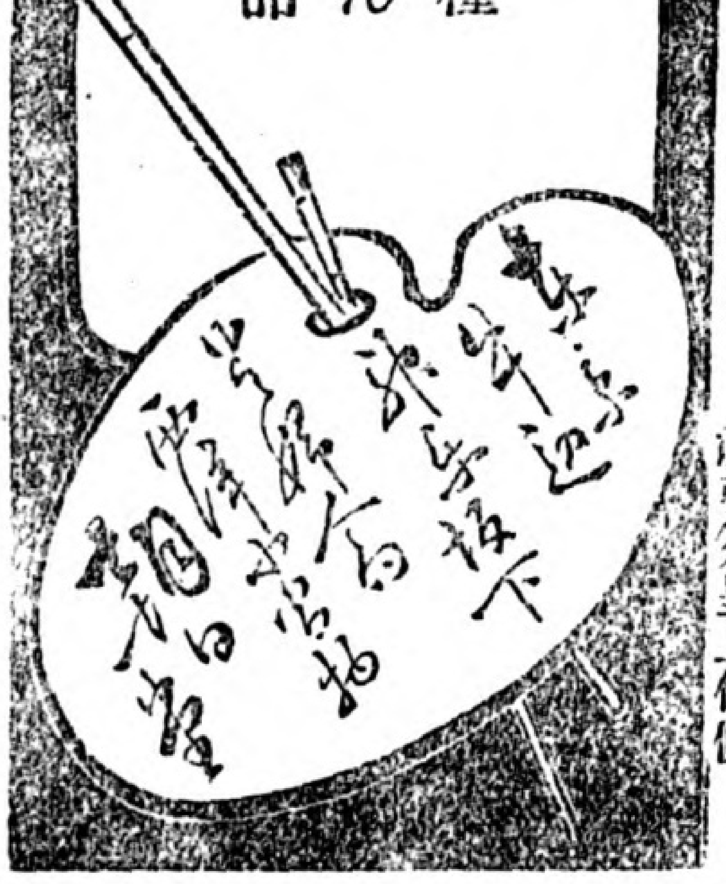
心の花、讀賣歌壇の歌とこたび新たに募れる歌との中より選びて、この一卷をなしつ

さゝれ石のかず〳〵、玉としづける、玉川の清き流に、たとへて、その名負せつるも、かつは人の心の眞玉なればなり

東京神田區錦町一丁目　修文館

十二月廿一日より廿七日迄　歳末大賣出し　卅錢御購求の方に福引券呈上仕候

貴婦人用最新形
肩掛、ボアー、マフ、各種
新着ヒザ掛、羽根ぶとん
佛國製リボン、造花、化粧品



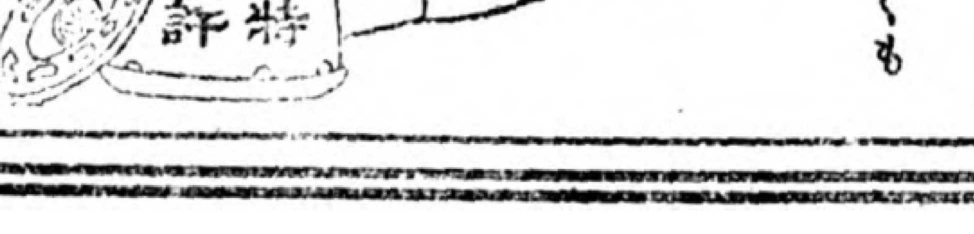
洋織物　裁縫物
毛布　敷物類
何なりとあり有まいと御思召品も御尋下さい

赤門おしろいは
博士方々謂ゆる赤門派の研究に依て出來たる最新最良無鉛無害の白粉なり
色艶とのりよきとは赤門白粉の特色なり
東京馬喰町　花王石鹸本舗　長瀬富郎　電話浪花三番

專賣特許　**改良火熨斗**（ひのし）　大九十錢　中八十五錢

今回五二共進會に於て進歩銅牌を受領す尚畏くも常宮周宮兩内親王殿下御買上の榮を賜る且御城用御方々より好評を得る

第一炭火の消ゆる事なし
絹及毛織物等何品にも使用して最も有功なり實に無類の明器なり



東京日本橋區本銀町三丁目
製造販賣元　永瀬近藏

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

松みどり香油

本香油は品質の善良、香氣の優雅なる、世上幾多の香油の比にあらず、交際社會に活躍する紳士貴夫人令孃は一日も缺く可からざる逸品なり

定價　大壜四十五錢　中壜貳十錢　小壜十二錢

製造本舖　東京上野廣小路　山崎屋油店　電話下谷一七三五

販賣店ハ各化粧店にあり

各所店內ニ陳列致置候間御一覽被下度奉希候尚御用ノ節ハ電話又ハ(はがき)ニテ御申聞被下候ハヾ直チニ店員相伺ハセ可申候

ダイヤモンド　貴金屬美術品　金銀懷中時計

中村時計店　東京神田區須田町六番地　電話本局一〇九〇番

御半ゑり新もよういろく

ゑり善

日本橋區本町通葺屋町　電話浪花一二七〇番

小町印　學生袴

帝都唯一受賞袴　小町學生袴

印　日本橋區彌生町　卸部　永井本店（電話浪花一八四一番）

神田區南神保町　小賣部　永井支店

家庭之友記者羽仁もと子編（明治四十年用）

家庭之友　家計簿

實價金四拾錢　郵税八錢

婦女新聞評　昨年發賣して大に好評を博したる實用的家計簿なり費目を米薪炭等費、敎育費、家具費、衣服費、交際費、住居費、修養費、娛樂費、職業費、特別費、臨時費等に分ち毎費目の下に豫算額記入欄あり支出するに從って豫算の剩餘又は不足額を記し斯くして月末、年末など殆ど算盤なしに豫算の過不足を知り得る樣作られたれば簡易にして實益あり月計表年計表新に添へらる

豫算超過に苦む人は是非此家計簿を使用し給へ

家庭之友

編輯　羽仁吉一　羽仁もと子

●「家庭の友」は育兒家政修養社交其他あらゆる家庭の問題に就て最も進歩したる最も穩健なる考案を世間に紹介し現に多くの熱心なる實行者を有して居ります　そして誰にても實行のできる

●「家庭の友」には一粒選の記事ばかりで無駄な文句は一行でもありませんどんな忙しい人でも容易く讀み終ることができます　そして成るべく多くの家庭に讀んで貰ひたいため一年十二冊分郵税共僅に金六十錢の廉價にて發賣

●「家庭の友」十一月十二月號は特に迎年準備號となし歳暮と新年の用意を詳かに記載しました新購讀者は此際郵券十二錢を御送り此二冊を御覽なさい

新案國旗合せ　一箱入　一組八十枚　金貳拾錢　郵税二錢

發賣元　本郷駒込西片町十　内外出版協會

十二月十五日より廿一日迄　歳暮大賣出し

御勅題模樣新年の松　發賣

半ゑりは神田東のまん限

本店　神田小川町通り（電話本局二八五三）

出店　勸工場博品館樓上　横濱出張店横濱館　赤坂田町五丁目支店

胃病良藥　太田胃散

かしこき邊りの御料に召させ給ふ

高貴御化粧料　完全無鉛

御料　御園白粉

ねり製　御園白粉

水製　御園白粉

こな製　御園白粉

高等化粧水　御園とき水

洋式化粧　御園クリーム

御園打白粉

濃厚化粧水　四季の花

にせ物あり御注意

製造元　胡蝶園　東京市南新堀化粧品製造所

發賣元　丸見屋商店　日本橋區橘町四丁目　電話浪花四四〇番

○色白く艶をだす最良之化粧石鹸（大形廿錢　小形拾錢）

松澤ホーサン石鹸

○到る所に販賣す（にせ物）あり松澤ホーサン石鹸と御買求を乞ふ

東京本石町四丁目　芳香藥種問屋　ムスク香水本舖　松澤常吉（振替貯金四四四七番）

東京買物用達合名會社

東京市神田區千代田町　（電話本局八九四）

東京に於て賣る物品は何品にても最も廉價に最も正確に最も迅速に最も親切に買入に盡力すべきに付き春を迎へん爲の用意の品物は最も速に申込まれたし

例年の通七日より　だらく大賣出し

新年勅題新年模樣　半ゑり帶揚類

目

○大見切　優等品三掛組　半ゑり　壹組　壹圓　貳圓

○大見切　福箱　ゑり帶揚帛紗入　帶止手柄下締入　壹圓と貳圓

○斬新ショール　都花織旭織刺繡縮緬　絹毛織類數多く有り

○男方襟卷　○女

○肩裏○長襦袢同袖○帛紗○襟飾○羽折ひも○前掛

大景品　年内中本支店進呈仕候

本店　新橋竹川町十二　電話新二〇二七　ゑり治

支店　神田表神保町壹　電話本局五九二　ゑり治

此大見切爲め手廻り不申地方御註文は繁雜の際送品御斷

帝國五二館内　左右兩店出品出店　ゑり治

新橋博品館内　階下出店　ゑり治

女學通信教授

●本會は女子敎育の普及發達を圖らんが爲に諸名家の講義に係る女子必須の諸學科を網羅せる女學の講義錄を發行して會員に配布す●小學より進みて高等女學校に入學し難き事情ある女子達は本會に入會して家庭に居ながら諸學科を講習し以て女の道を辨へ給へ●本會の基礎確實にして講義錄の有益多趣なることは夙に世の定評あり昨年冬本會創立十週年に當り畏くも皇后宮より御歌特賜の恩命を蒙れり●先月より第七回目の前期講習會を開く此際とく入會申込あれ●詳細の會則希望者はハガキ又は電話にて請求あれ直に送呈すべし

十一月二十日　初卷發行

新學期を開き會員を募集す

○本會創立以來十二年會員四萬人に達す○月謝金廿五錢入會金不要

東京市麴町區下二番町卅七　大日本女學會　電話番町一三三〇

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

○新澤庵漬豫約

正味壹樽　定價貳圓貳拾錢

豫約澤庵は本年十二月より來る四十年十二月まで御使用分三升鹽より八升鹽迄御入用の際御好に應じ差上升御契約の節豫約金として一樽に付金壹圓拾錢申受け殘金は物品受渡しの節申受升就ては御契約間一ヶ年中相場如何なる變動高直に成りても増金又は破約等の卑劣の事は誓て申出ず御請求次第善良無比の品差上ます右御用命の節は御一報次第迅速參上御愛顧御引立を以て此際御申込を乞ふ

東京日本橋區鐵砲町廿四番地

輸出漬物店　松島商店

愛國婦人第百十八號の廣告を見てと御記載御注文の向には一割引

美人トナル秘密

冬季は尤も必用

色の白きは七難かくすと申し御婦人は勿論男子にても皮膚の奇麗な程快きものはなし○此皮膚を奇麗にすると云ふことは平素の食物と衛生に依るとは云へ○歐米人が艶の美はしく皺の少なきは日ノ出クリームを缺くべからざる化粧品として使用しつゝある所以にして○日ノ出クリームが又東洋の御方にも適當なることは衛生試驗所の證明其他各位の實驗上明かであります

色を白くしキメを細かにするは勿論ヒビシモヤケ等を全治する外日ノ出クリームは電氣乳劑なれば○皮膚を摩擦する時は脂肪が一面に普及し柔軟ならしむる故△老年に至るも皺の寄ることなく○如何に其花の如き若き姿を永く保ち得るでしようか

彼の恐るべき白粉の鉛毒を防ぐのは無論日本流の薄化粧白粉や白粉下を用ゆるの要なく○又つき惡き眞の無鉛毒の使用前日ノ出クリムを用ゆれば極めて美しく付き○眞正の美人となることは獨乙國醫學博士エ、エ、ボーン氏の證明する所

さて如何に日ノ出クリームを使用すべきか初めて溫湯にて顔手足を洗滌し能く拭ひし上日ノ出クリームの少量を○指先きにて充分擦り込たる後ハンカチーフ或は軟紙にて拭ひ去るべし○尚ほ白粉を用ひらるゝ方は前記の如く拭ひ去りたる後白粉を使用さるゝ時は衛生上有効なるのみならず櫻花の滿開せし如く美麗を極むべし

右化粧用日ノ出クリーム品切の處今回入荷仕り候間御注文被下度候尚毛髪用日ノ出クリームはコスメチック、香油等より適度に亂髪を止め毛髪をも保護養生する煉香油の如き品なり何れも佳香馥郁として未生的に充備せり

●化粧用●毛髪用何れも金壹圓郵税拾錢小瓶參拾錢郵稅四錢

日ノ出クリーム輸入元　歐米化粧品專門商

東京日本橋區村松町廿二番地　須原啓三郎商店

近時粗惡の僞品を販賣する不正商店あり、必ず日ノ出の商標と日ノ出クリームの文字に御注意あらんことを

德用　大俵炭　堅炭　土釜

右大俵炭は山出しのまゝにて壹俵の目方は拾貫目内外皆かます入に候賣買は目方に掛け候故至極御經濟の燃料に候間是非一度御ためし願度御用の節は電話又は端書にて被仰附候へば遠近多少を問はず無賃配達仕候

東京市神田區三崎川岸　電話本局三千貳百八番　戸塚商店

釀造元　千葉縣野田町　茂木七郎右衛門　電信略號（キハク）又（[illegible]）

最上醬油　キハク印

香

於聖路易博覽會　名譽大賞牌受領

キハク印醬油の味がよくて調理にかなつて居ると云ふことは皆さん一般の評判ですどーか其あぢのよくてそして經濟であると云ふことを御ためし願ます

東京支店　日本橋區小網町三丁目　中野長兵衛　電話浪花五七七番

御婦人小間物　一式御好自在

意匠斬新　束髪かんざし　リボン、ヘーアピン、サイドコム

美術小間物商　三ツ屋　東京市神田區須田町十番地　電話本局二〇七六番

支店　神田神保町東明館内　新橋ぎわ博品館内　五二共進會階上

カメリヤ洗粉

カメリヤは時代の要求により生れたる最新最良の洗粉なり香氣爽快にして色を白くし皮膚を艶麗ならしむ

定價　瓶入十二錢　袋入五錢　小袋三錢

發賣元　小林富次郎

他と比較せよ　眞價は一目分明

婦人世界編輯局編纂

明治四十年家庭日記

○先づ頁數に注目せよ完全の家庭日記は八百頁以上を要す如斯者唯本日記のみ不完全の日記は無効也

○獨特新案見よ各月毎に普通日記料理日記通信日記交際日記育見日記賄帳日用帳計算表收支對照表季節料理衛生皆別々

○無類特色見よ毎日の上欄に豫定欄あり又毎月の終りに重要出來事記入欄あり其他病人日記知人住所錄進物控裁縫控等

○附錄には育見法看病法經濟法進物好適品悉く掲載

〔妻君女學生共通の最完全日記〕

洋裝美麗八百五十頁　五拾錢　郵稅拾錢

東京京橋南紺屋町　實業之日本社

消化新藥

醫學博士井上善次郎氏の實驗報告に曰く　胃腸障害は往々疾病誘發の根元となり、又疾病治癒の轉居を遲鈍ならしむるもの甚だ多し。殊に米飯を常食とする本邦人に於て然りとす。之を救濟する一に完全なる澱粉消化藥あるのみ、此目的に向て余は高峯博士の發見に係るタカヂアスターゼを使用し、好果を收め、此種の製劑中最優等のものたることを確信す。

醫學博士栗本東明氏の實驗報告抄錄　高峯博士發見のタカヂアスターゼが唯一の澱粉消化藥として著大の效力を有するとは業に既に世の定評あり今や予は其實驗に基きタカヂアスターゼが結核患者の消化障害に對する著效を確認すると共に此種の患者に毎に之れが服用を勸告する者なり

タカヂアスターゼ錠劑粉末各大小容器入各地藥舖にて販賣す模造品あり必ず高峯氏タカヂアスターゼと乞ひ御指定。

實驗報告集は無代進呈

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

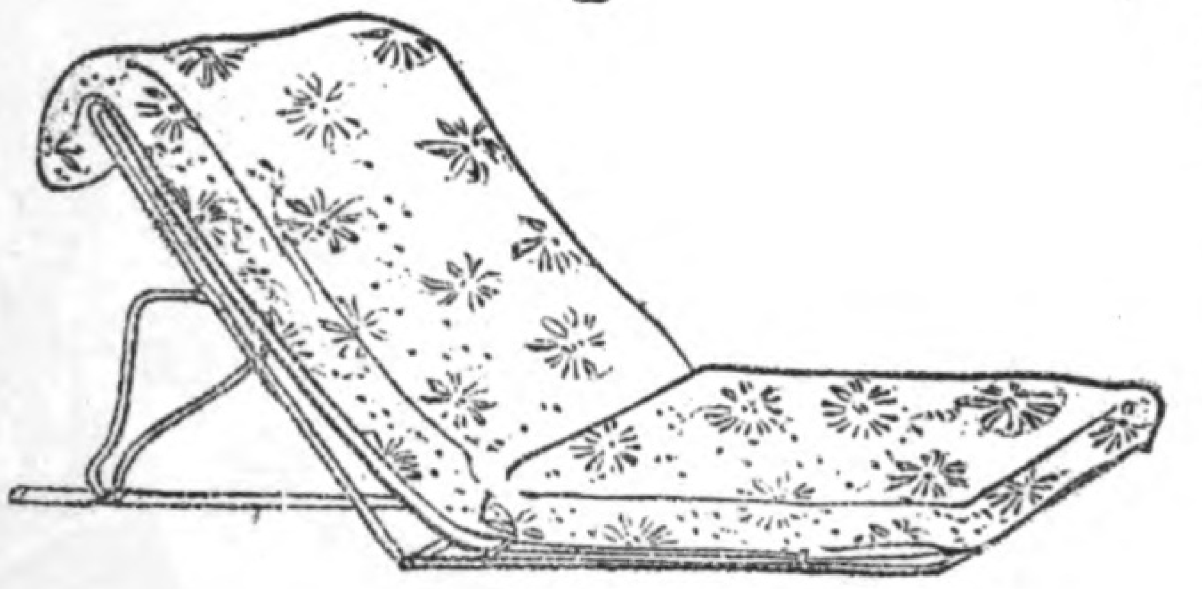
座椅子

特許第九〇一〇號

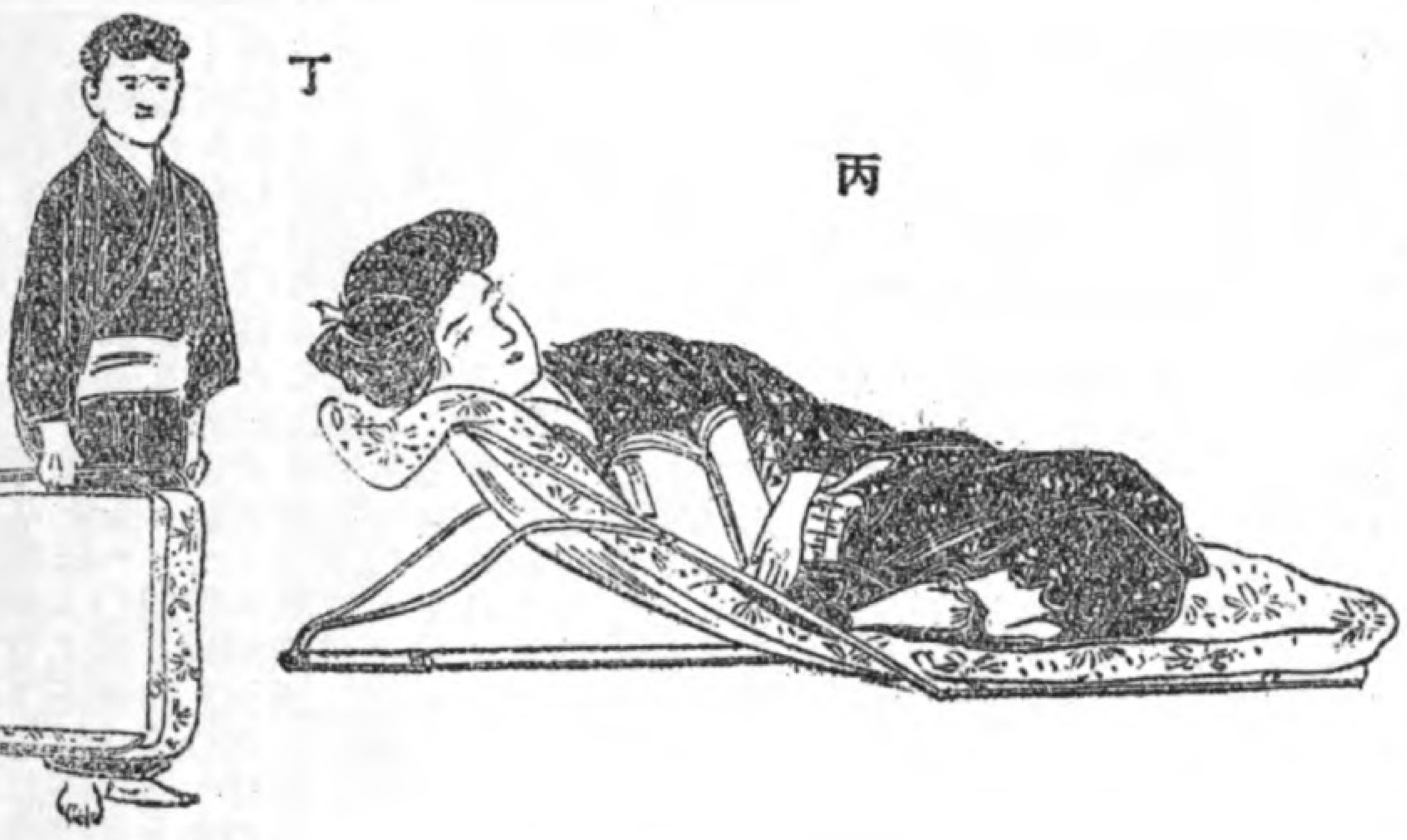
此座椅子ハ日本風又ハ韓國風ノ室内ニ適シ構造ヨリ起ル自然ノ彈性ニヨリテ身體ヲ安全ニシ愉快ノ休息ヲ與フ故ニ老人、産婦、長時間讀書ヲ爲ス人滊車滊船ノ旅行ヲ爲ス人胸腹部脚部等ノ慰安ヲ要スル病人ニハ必要欠クカラザルモノナリ
本圖甲ハ靜坐ニ適シ甲ノ手摺ヲ後部ニ廻シテ乙ノ如クスルトキハ讀書ニ適シ更ニ手摺ヲ後部ニ送リテ丙ノ如クスルトキハ安眠ニ適シ使用終リテ丁ノ如ク疊込メハ携帶ニ便ナリ
材料ハ鐵骨ニ小豆色ニエナメルヲ塗リ之ニ強靭ナル布帛ヲ張リタルモノ又蒲團ハ美麗ナル更紗等ヲ用キ新ラシキ打綿ヲ入レタルモノナレバ高尚優美ニシテ室内ノ裝飾トモナルベシ歳暮年始ノ進物ニモ適ス

甲

乙



丙　丁



大西軍醫正より來狀

近來日本家屋用座椅子の類各種製造販賣するものあるも貴下發明の座椅子は他のものと撰を異にし特に重症の患者用に適當なるを認む余は自から之を試用し又重症各種患者に應用せしに特に半臥位に於ける使用は最も好適にして從來患者を半臥位にするに或は三角蒲團を用ゐ或は積夜具を用ゐたるも工合甚宜しからざりしが貴下發明の座椅子により始めて安靜の半臥位を與ふるを得るに至れり此器の爲め今後多數患者に慰安を與へ治療を幇くると多大なりと信すと云々 於廣島

陸軍一等軍醫正　大西龜次郎

價格從來ハ尙試驗中ニアリシヲ以テ單ニ金五圓以上ト致セシガ最早確定ニ付左ノ通リ定メ候

一號　金五圓五拾錢
二號　金六圓五拾錢
三號　金七圓五拾錢

東京市内配達無料
東京市外荷造賃配達料實費

發賣所　東京市芝區下高輪町廿一番地　**武田樂民堂**

諸官省御用

東洋一 **製造大販賣** 御小賣

夜具・蒲團 綿類 **ざぶとん**

●上等下等澤山あり御好次第山の如し
●街鐵も外堀線も小川町東明館前下車を乞

東京神田區表神保町　**矢田商店**　市内無賃配達
電話本局長二〇一八

●綿質保險附●確實大安賣●縱覽御隨意

第三回新學期開始

大日本淑女學會

會員大募集　目下入會の最好機

▲事情があつて高等女學校に入る事が出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に二ヶ年間に高等女學校程度の教育を完全に正則に授けます

▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません。本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いやうにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を每號附錄とします

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ教育に充分經驗のある方のみです講義は只親切と云ふ事が主として丁寧懇篤に說いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です

▲本會講義錄は右に述べし通り最も完全したものでありますが、會費は極めて少額で都會一ヶ月の遊學費で優に全期を終る事ができます。

高等女學校程度の講義錄發行

批評一致

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也
▲每日新聞評　米國の通信教授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり
▲二六新聞評　高等女學校の全科程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり
▲日々新聞評　講義は總べて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり
▲都新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し
▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味と併て有する事斯くの如きは稀也

上掲の批評を御覧にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

▲規則書▼　端書にて申込あれば直に郵送す可し

◉東京神田南甲賀町　**大日本淑女學會**　(電話本局三千四番)

歳末の御贈答品

として最適當せる商品切手の外

香油、香水、白粉、石鹼、手巾、肩掛、ボーア、襟巻、半襟、帽子、帛紗、風呂敷、銀貨入、など種々取揃置申候間澤山御注文被下度奉願上候。敬具。

猶遠方より御注文の案内として、今般『しやうひん案内』と題する美麗なる冊子、印刷致候に付御一報次第早速送呈可申上候

東京市日本橋區駿河町
三越吳服店
振替貯金口座番號三百番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

東京市麴町區錢瓶町（常盤橋内）

日本興業銀行

電話本局 三、三〇〇番 四一番 三七番 （特）一〇二番

資本金壹千七百五拾萬圓

營業科目

一 擔保附社債に關する信託業務
一 有價證券其他貴重品等の保護預
一 有價證券の賣買元利金の支拂及び取立
一 地方債、社債、株式等の發行募集事務
一 各種の信託事務
一 國債證券、地方債證券、社債券、株券の擔保貸付及手形の割引
一 國債證券、地方債證券、社債券の募集又は引受
一 法律規定に依り設定したる財團を抵當とする貸付
一 定期預金、當座預金、特別當座預金

東京市日本橋區通一丁目

合名會社 森村銀行

電話(特)本局六七三番　電話本局四九八番

定期預金 六ヶ月以上 年五分五厘
當座預金 百圓に付日歩 八厘
特別當座預金 同日歩 壹錢壹厘

東京市日本橋區小舟町三丁目

株式會社 第三銀行

電話浪花四四二番 浪花四五一番

預金利子

定期預金 六ヶ月以上 年五分
當座預金 百圓に付日歩 八厘
別口當座 同日歩 壹錢

全國送金無手數料
其他銀行一般の業務特に便宜取扱可申候

天下一品

最上醬油

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

釀造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

スコッツ乳藥

咽喉諸症肺炎其他貧血病ニ著大ノ効驗アり早ク試賜ヘ

説明書ハ横濱郵便局私書函第五十八號
スコッツ乳藥部へ御申込アレバ無代價ニテ進呈ス
代理店横濱市山下町廿八番館

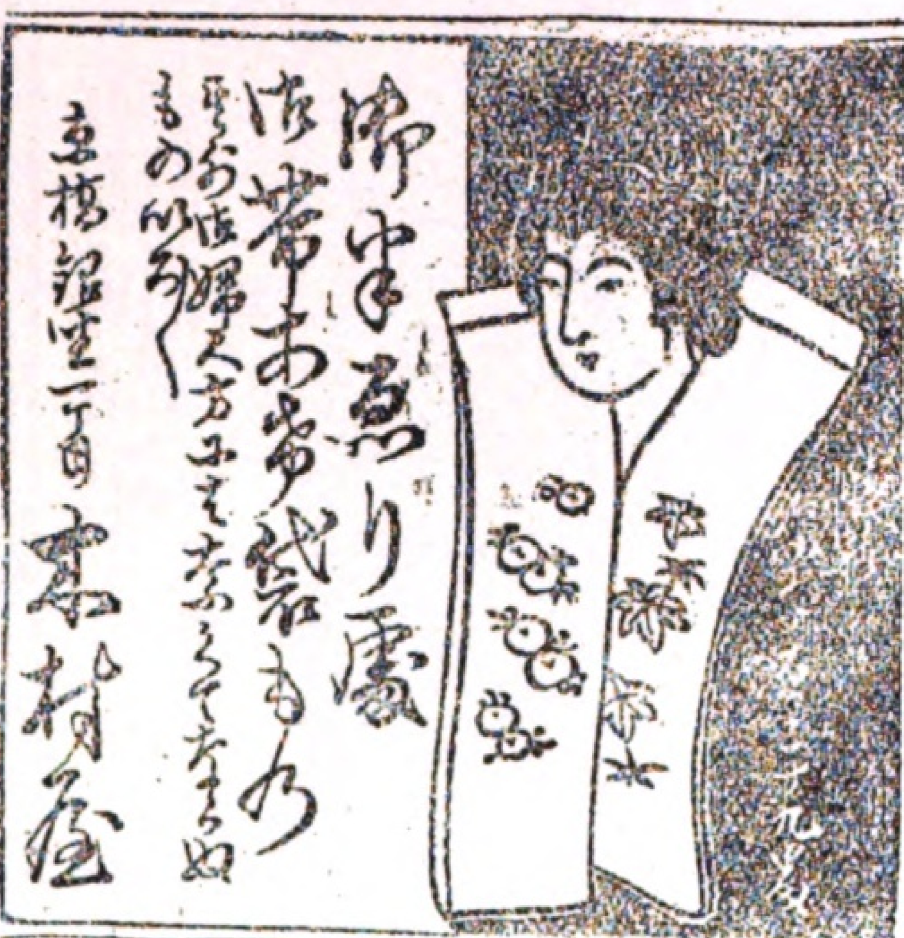
米國貿易商會

袴乃親王

卸部 美濃磯本店 東京日本橋區長谷川町 電話浪花二八五九番
小賣部 美濃磯本郷支店 本郷區本郷五丁目 電話下谷一四一五番
美濃磯淺草支店 淺草區諏訪町
美濃磯佐内町支店 日本橋區佐内町
美濃磯神田支店 神田區小川町
美濃磯支店 深川高ばし際
小田商店 芝區新櫻田町
伊澤商店 牛込區神樂町一丁目
伊澤支店 四谷區傳馬町一丁目

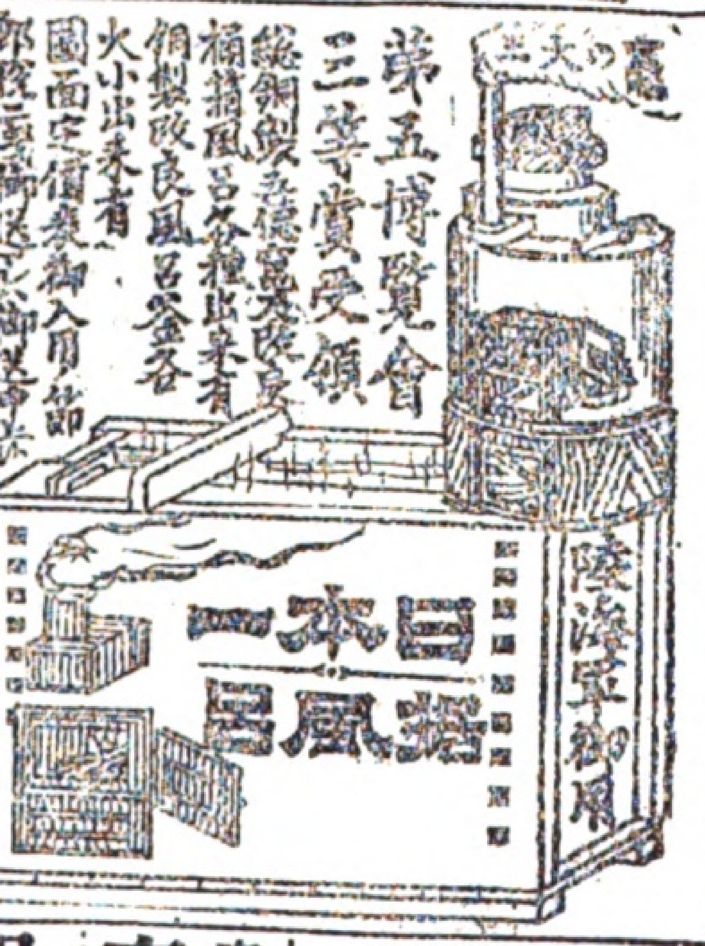
琴 三味線
胡弓諸樂器
象牙製琴柱
撥 音曲糸
附屬品一式

樂器商 菊屋總本店
東京神田區かじ町十二 電本局二四四九番
分店 本郷區本郷二丁目廿番地
十二月十五日より歳暮賣出



正札附陳列場
西洋小間物
帽子各種
婦人用小間物
東髪用具
内外化粧品
玩具文具
中久商店
東京神田小川町通り 裏神保町一番地

來る十二月卅一日迄歳暮福引大賣出し



發賣元 東京日本橋區通油町十九（電話浪花一四六番）
銅器物問屋 南部鐵瓶販賣 石川商店
代理店 京都柳馬場 春井喜助

醫院案内

婦人科産科榊病院
院長 醫學博士 榊順次郎
副院長 醫學士 久保徳太郎
東京麴町三番町卅三（電話番町三九五）

内科小兒科 特に呼吸器病
麴町はやぶさ町二十八番地
ドクトル 川瀨元九郎
電話番町八二二番

婦人病專門
院長 櫻井克己
芝明舟町十九 虎門外宮樣前 電話新橋三三二四
櫻井醫院

小兒病診療
醫學士 内田愼太郎
淺草區福井町貳番地 宅診午前 往診午後
電話下谷七二八番

院長 醫學士 鳥山南壽次郎
鳥山内科院
京橋區鈴屋町十一番地 電話新橋千七百四十六番
午前診察 午後往診

神田區西今川町三番地（電話本局三〇一九）
内科病特に腦脊髓神經疾患
峰内科醫院
院長 ドクトル メヂチーネ 峰秀世

内科一般
東京神田區美土代町三丁目十七番地
午前宅診 午後往診 板垣亨
電話本局貳千九百七十番

小兒科
乳兒ノ疾患及ビ育兒法 小兒皮膚病
拙者儀久ク獨逸伯林大學ニ於テ斯學ヲ專攻シ歸朝後毎日診療ニ從事ス
ドクトル メヂチーネ 長井岩雄
日本橋區數寄屋町一（電本百八十）

東京日本橋區濱町三丁目七番地
産科婦人科 楠田病院

眼科專門
診察時間 午前七時より十二時 午後三時より五時迄
神田區連雀町十八 郵便局前
ドクトル 宇良田唯子
▲每月第一日ハ診料藥價共無料

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

美術貴金屬袋物商

東京日本橋區人形町通り

澤田治助

長電話浪花二五六九番

新年用品着荷

●新着英國製更紗各種
●小兒上衣
羽根フトン
●ボアー（ネグレット）
●婦人、小兒用帽子
●キヤンバス、及ビ
●アイスウール各色
●肩掛、長卷、膝掛
●旅行用化粧道具
●外西洋小間物一式

東京市京橋區銀座三丁目
伊勢與 三枝小賣店
電話新橋三九二七番

新橋角 帝國博品館 電話新一六五二 二二六一

確實 福引大賣出し

來る十二月十六日より卅一日迄

一月一日、二日、三日、四日は年玉進呈

●一圓以上御買物に對し福引券一枚、一圓増毎に福引券一枚増呈す

籤數二千五百本一組に對する獎品價格金三百七十五圓也

内譯

二十圓、十圓、五圓、三圓、二圓、一圓五十錢、一圓、五十錢、三十錢、二十錢、十錢迄の物品及物品引換券

但し一本も外れなし

詳細は抽籤所前に掲示致置候

●一圓以下の御買物にも粗景進呈す

愛國婦人記者 手島益雄氏著

農村の幸福法

二百ページ　定價金三十錢　郵稅金四錢

本書は著者が專ら研究せる家庭問題を基礎として一般家庭の幸福を增進する爲め且つは町村の自治を發達せしむる目的を以て執筆せるものにして本編を上下に分ち上編は**家庭**、**教育**、**宗教**、**公共**、**產業**、**組合**、**衞生**、**慈善**、**會合**、**娛樂**等の各章に別ち最も新らしき着想を以て丁寧親切に說述し、婦人の庇護に勉むると同時に婦人の伸權方法を計り、圓滿なる**家庭の幸福**を得るの方法より進んでは一町一村の幸福を計る事に及ぶ、第二編は「**如何にせば貧乏になれるか**」との題目の許に寓語を使用し、巧に家庭の弊害を諷し、以て富裕なる家政を營む方法を示し「**臺所の改良方法**」としては著者が各名家及び簡便なる臺所の實見に依る新工夫を發表し「**家庭暦の作り方**」に就ては著者の苦心による新方法を掲げたり以上各章の内に又各項を別ち**文章は最も平易**なる言文一致體を以てものし、猶總ふりがなを附し**數葉の繪畫**をも挿加へたれば、家庭に於ける**主婦**は素より其**主人**に於ても苟も家を善く齊へ國を治め一家幷に一國の幸福を計んとの希望を持つものは本書を繙かさる可からす

發行所　東京本郷區東片町百十一番地　新公論社

取次所　東京麹町愛國婦人會内　愛國婦人發行所

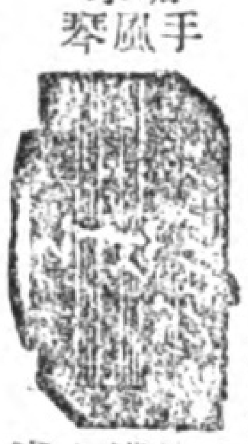
金銀盃類

秋の月にも春の花にも盃ならして何んの樂しみかあらん殊に戰後功を論し賞を行はるゝにあたり祝盃として用ゐらるゝには又ふさはしき意匠の盃なかるべからずまた賞品として御授與せらるゝ盃は弊堂のものに限るへし

宮内省御用達　東京市下谷池の端仲町　玉寶堂　電話下谷一二四四番 特九六五番

◎舶來バイオリン新着◎西川製風琴

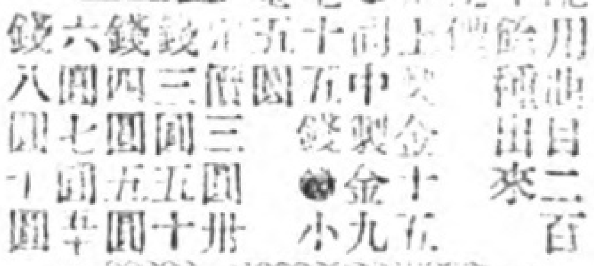
舶來手風琴



無類獨奏 紙腔琴

◎配用曲目二百五十餘種出來 ●定價上製金十五圓 大形中製金九圓七十錢 ●小形金五圓 ●同三圓三十錢 定價三圓五十錢 四圓七十錢 六圓四十錢 八圓半

西洋（ハーモニカ）横笛



●定價金卅五錢 四十錢 五十錢 六十錢 七十錢 一圓 一圓五十錢 廿圓以上

◎大聲蓄音器定價卅三圓五十五圓六十五圓 ◎平圓盤發音器定價金廿五圓卅七圓金五十三圓金八十圓

高等玩具 教育的 新着

東京銀座三丁目二番地　十字屋樂器店

各女學校御用

附屬品幷に造花器械類一式

東京市日本橋區横山町一丁目十六番地
天野卯兵衛
電話長浪花一六四三番

營業目錄御入用なれば愛國婦人を見てと御書添へ御申越被下度候

愛國婦人廣告取扱

京橋區數寄屋橋外　弘報堂
神田三河町　博報堂
京橋區南紺屋町　一星堂
京橋區南鍋町　秀逸社
日本橋區上槇町　萬年社
日本橋區箱崎町　春風舍
京橋區宗十郎町　正路喜舍
京橋區日吉町　帝國通信社
同區彌左衞門町　京華社支店
同區南鍋町　廣告社

（定價金三錢 一ヶ月六錢 一ヶ年六拾錢）

發行兼印刷人　山澤俊夫
編輯人　手島益雄
發行所　東京麹町　愛國婦人發行所
印刷所　東京牛込　秀英舍工場

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

愛國婦人第百拾八號附錄

帝國圖書館 IMPERIAL LIBRARY

明治三十九年十二月廿日發行（每月二回五日廿日）
明治三十五年三月二十七日（第三種郵便物認可）

山梨支部第一回總會參列職員

發行兼印刷人　山澤俊夫　編輯人　手島益雄　發行所　愛國婦人會内愛國婦人發行所
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN